

蔵王町内遺跡発掘調査報告書 3

各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査
(平成 26 年度)



原遺跡出土土器 (平安時代)

原遺跡
北割山遺跡
愛宕山遺跡

2016 年 3 月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

蔵王町内遺跡発掘調査報告書 3

各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査
(平成 26 年度)

原遺跡

北割山遺跡

愛宕山遺跡

2016 年 3 月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会



原遺跡 第1群土器（古墳時代前期）



原遺跡 第2群土器（平安時代前葉）

序 文

蔵王連峰の東麓に抱かれた蔵王町には、蔵王火山の造り出した変化に富む地形・地質と、四季折々の豊かな自然に育まれた山麓文化が息づいています。蔵王の山と、そこに暮らす人々が創り出した蔵王山麓の風景は、私たち町民の誇りであると同時に、将来へ守り伝えるべき大切な財産でもあります。

蔵王町には約 200 か所の遺跡が発見されており、先人の生活文化を伝える貴重な文化遺産として保護されています。遺跡は、古文書などの文字資料だけでは知ることのできない地域の実情や、まだ文字がなかった時代の人びとの暮らしぶりを、私たちにありのままに教えてくれるものです。

一方で、町内各所の地中に埋もれている遺跡は、様々な開発による破壊の危機にさらされています。このため当教育委員会では、遺跡地図の公開などで遺跡の所在を周知するとともに、開発との関わりが生じた場合には宮城県教育委員会と連携して遺跡の保護に努めています。

本報告書には、平成 26 年度に各種開発事業計画と遺跡の関わりを確認するために実施した遺構確認調査と、小規模開発事業で遺構の破壊が避けられない場合に実施した緊急発掘調査の結果を収録しています。このうち、町道中ノ内磯ヶ坂線改良工事に伴って発掘調査を実施した原遺跡では、古墳時代前期と平安時代前葉の竪穴住居跡が発見され、当時の集落が営まれていたことが判明しました。

先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、活用を図りつつ未来へ継承していくことは、現代を生きる私たちに課せられた責務です。蔵王山麓の歴史や文化遺産は、蔵王町に息づく山麓文化の根底となるものであり、現代社会において求められている地域色豊かなまちづくりにとっても欠くことのできないものであります。本報告書にまとめられた学術的成果が広く町民の皆さまや各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、各種開発事業主の方々には、遺跡保護の重要性について深いご理解を賜り、事業計画との調整や遺跡調査の実施等にご協力いただきました。また、調査の実施と本報告書の作成に際して、多くの方々にご指導とご協力を賜りました。ここに心より深く感謝申し上げます、序といたします。

平成 28 年 3 月

蔵王町教育委員会
教育長 佐藤 茂 廣

例言

1. 本書は、蔵王町教育委員会が埋蔵文化財保護調整事務の一環として平成 26 年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書で報告するのは、下記の発掘調査の成果である。
各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査（北割山遺跡・愛宕山遺跡）
小規模開発事業に伴う遺跡の記録保存を目的として実施した緊急発掘調査（原遺跡）
3. 本発掘調査とその整理・報告書作成作業は、町単独事業として蔵王町教育委員会が実施し、教育総務課文化財保護係が担当した。
平成 27 年度の職員体制は下記のとおりである。
教育長 佐藤 茂廣 教育総務課長 菅野 和茂 参事 佐藤 則之 課長補佐 佐藤 浩明
主幹兼文化財保護係長 佐藤 洋一 主査 鈴木 雅
文化財専門職臨時職員 庄子 善昭 渡邊 香織 我妻 なおみ 鈴木 和美 江尻 祥子
文化財室内整理作業員 我妻 英子 我妻 紀子 岩佐 若奈 菅野 慶一 佐藤 かおる 佐藤 貴美子 佐藤 恵子 千葉 彩華 松崎 祐二
松田 律子 渡部 真理
5. 本発掘調査の整理作業にかかる遺物実測は鈴木和美、拓本は菅野慶一、遺物写真撮影は庄子善昭が担当した。
6. 遺構図トレースは我妻なおみ、遺物図トレースは岩佐若奈が担当し、デジタルトレースにより作成した。
7. 本書の執筆・編集は鈴木雅が担当し、原遺跡の事実記載については調査主任の佐藤洋一が監修した。
8. 本発掘調査の写真・図面等の記録資料と出土遺物は、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡例

1. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図、調査区配置図・遺構平面図の方位は座標北を示している。
2. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図は下記の図幅を使用して作成した。
「蔵王町の地形区分と遺跡の分布」(第 6 図)
：5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」(宮城県、昭和 58 年調査)
「蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図」(第 7 図)、「調査地点位置図」(第 8・27・31 図)
：電子地形図 25000 (国土地理院、自由図郭版・平成 24 年図式・平成 25 年 4 月 9 日調製)
3. トレンチ配置図・遺構配置図に記載した現況 GL からの深度は、掘削したトレンチ底面の深度であり、遺構残存面と一致しない場合がある。
4. 土層の記述で、ローム質層の上部で確認されるしまりのない褐色系シルトを褐色森林土、黒色系シルトを黒ボク土と記載した。褐色森林土は本州地域の森林を広く覆う成帯性土壌であり、黒ボク土はこれに草原植生下で局所的な条件が加わった成帯内性土壌である(細野 1994)。いずれも第四系の最上位層を構成する未成熟な堆積層であり、整合状態の堆積条件下では下位のローム質層に漸移する。
5. 土色の記述は、「新版標準土色帖」(小川・竹原 2005)を参照した。
6. 遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
7. 遺構略号は、下記のとおりである。
S I : 竪穴住居跡、S K : 土坑・落とし穴状土坑、S D : 溝跡、Pit : 柱穴、Pot : 一括土器、P : 住居内柱穴、K : 住居内土坑
8. 遺構・遺物実測図の縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
9. 遺構実測図では、下記の表現方法(CMYK 値・パターン)を使用して記載した。
床面硬化範囲  : 確認した範囲に灰色(K:10%)の塗り
赤色硬化範囲  : 確認した範囲に赤色(M:80%, Y:80%)の塗り・パターン表示
攪乱範囲  : 確認した範囲にパターン表示(断面図)
10. 遺物実測図では、下記の表現方法(CMYK 値)を使用して記載した。
黒色処理  : 確認した面の一部に灰色(K:10%)の塗り
赤彩  : 確認した範囲に桃色(M:30%, Y:40%)の塗り
11. 遺物観察表では、下記の表記方法を使用して記載した。
製作工程：調整・加工の痕跡に前後関係が確認でき、痕跡 A より痕跡 B が新しい「A → B」、新旧不明：「A・B」
墨書土器：判読不能の文字は「□」で記載した。
計測値：残存値である場合は()を付した。
12. 報告書抄録に記載した各遺跡の緯度・経度は、地理院地図(<http://maps.gsi.go.jp/>)で取得した調査地点付近の参考値(世界測地系)である。
13. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献・報告書については巻末に一括して掲載した。なお、蔵王町教育委員会発行の文化財調査報告書については巻末に一覧を掲載し、本文中の引用箇所では「町 20 集」のように省略して記載した。

目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 蔵王町環境と遺跡 1

第2章 平成26年度の遺跡調査概要 7

第3章 調査の成果 15

第1節 緊急発掘調査 15

1. 原遺跡 (町道中ノ内磯ヶ坂線改良計画) 15

第2節 遺構確認調査 41

1. 北割山遺跡 (太陽光発電所建設計画) 41

2. 愛宕山遺跡 (愛宕神社進入路新設工事計画) 45

第4章 総括 47

参考・引用文献

報告書抄録

第1章 蔵王町の環境と遺跡

1. 蔵王町の位置と自然環境

(1) 地形・地質

蔵王町は宮城県南西部にあり、奥羽山脈に連なる蔵王連峰の東麓に位置する（第1・2図）。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km²を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が南東部の松川と白石川の合流点で20mを測る。

町域の6割を山林原野が占めており、西部は高原・山岳地帯、東部は平野・丘陵地帯である。西部は蔵王火山の活動による溶岩台地が発達し、火砕流堆積物からなる扇状地地形も見られる。東部の松川流域には盆地や段丘群が形成されており、沖積平野での稲作と丘陵部での果樹栽培が盛んである。

蔵王連峰は、火口湖（御釜）・溪谷・湿原など変化に富んだ地形を擁し、高山植物をはじめとする多様な動植物が生息・生育する。蔵王国定公園・蔵王高原国立自然公園の指定地域となっているほか、成層火山群の活火山である蔵王火山は地質学的に貴重なフィールド

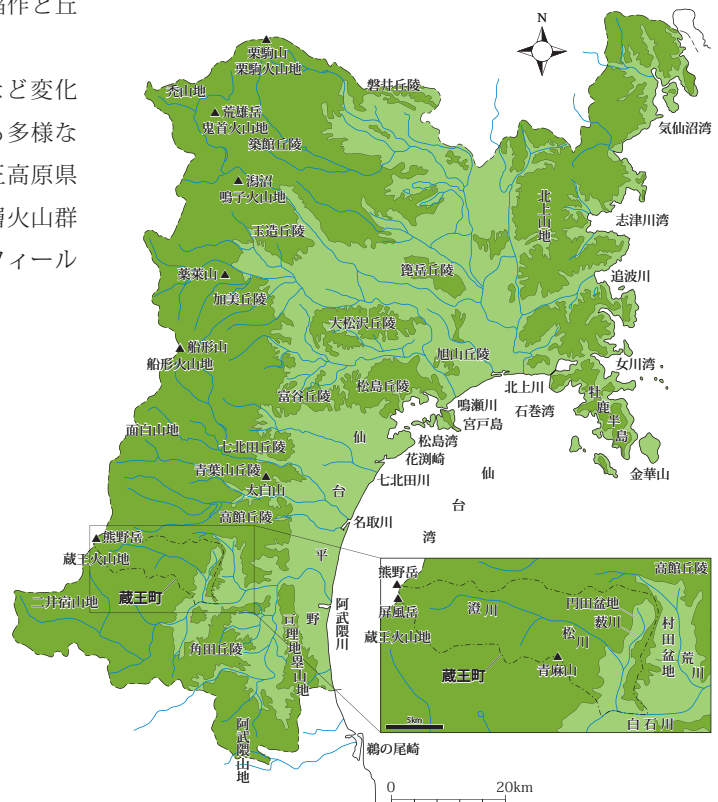
ドとして「日本の地質百選」に選定されている。

蔵王連峰から東流する松川は、独立峰をなす青麻山の東麓で流路を南へ向けて白石川に注ぐ。町域の東部では2～3段のやや広い段丘面を形成し、北東部では支流の藪川流域に円田盆地を擁する（第6図）。

円田盆地は東西1.2km、南北3.5kmの底面を持ち、南を除く三方を丘陵で画されている。盆地北側から西側にかけては高木丘陵、東側は愛宕山丘陵と通称されている。盆地内を蛇行しつつ南流する藪川は自然堤防が未発達で、流域に湿地帯を形成している。



第1図 蔵王町の位置



第2図 蔵王町と周辺の地形

(2) 気候

宮城県地方の気候区分は、全体としては温帯湿潤気候に属する。温帯湿潤気候では、平均気温が最寒月でマイナス3度以上、最暖月で22度以上で四季の変化が明瞭であり、夏に高温多雨となる。宮城県地方はこうした気候の北限に近く、海拔標高が500mを越すと、最寒月の平均気温はマイナス3度以下となり、亜寒帯気候の様相を帯びる。夏季の平均気温は最暖月の8月で25度前後のところが多い。降水量は、年間の平

均値が仙台で1,392ミリ、西部山地で2,000ミリ前後である。積雪日数は、海岸部で30日以下、中央部で50日程度、西部山間部では90日以上に及ぶ。

県南部では、沿岸部は海洋性気候の影響が強く、年較差、日較差ともに小さい。夏季は冷涼、冬季は緯度の割には温暖であり、福島県浜通りの気候の延長線上にある。一方、蔵王町を含む西部内陸方面は福島県中通りの気候の延長線上にあり、より寒冷で積雪も多く、豪雪地帯に指定されている。

(3) 動植物相

町域の東部は古くから人間活動の場として開発され、青麻山以東の平野・丘陵地帯を中心に水田・畑地などの農耕地が開けている。丘陵地帯では、かつては薪炭材などとして盛んに利用され、萌芽再生によって維持された里山の雑木林に特有のコナラ・クリ林が優勢であった(第3図)。現在はこれらの伐採が進んでスギ・ヒノキ・アカマツが植林されたり、果樹園が開かれてモザイク状の分布を形成している。

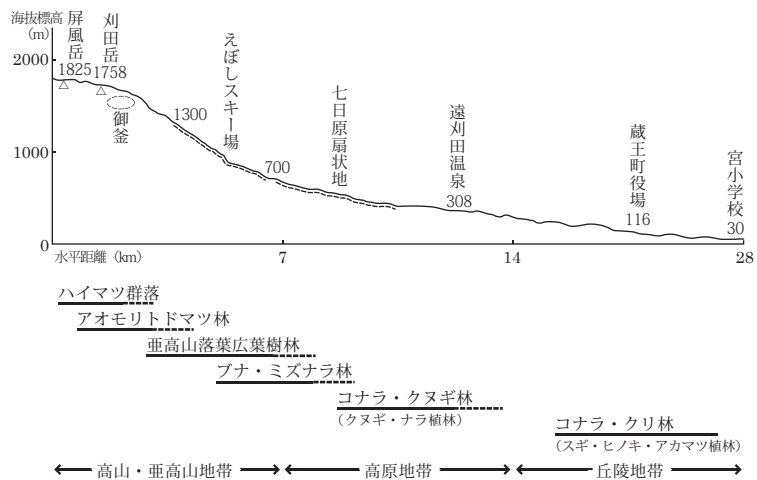
高原地帯も遠刈田温泉から七日原にかけてはコナラ・クヌギ林が優勢であったが、伐採が進んで草原となった後は厳しい気象条件により植生が回復せず、クヌギ・ナラなどの植林・造林が繰り返行なわれている。烏帽子岳中腹にかけては冷温帯落葉広葉樹林の山地帯で、広大なブナ・ミズナラ林が形成されている。

西部の亜高山帯では、常緑針葉樹林のアオモリトドマツ林が広大な森林を形成している。屏風岳東面の断崖には亜高山落葉広葉低木林が分布する。

さらに高度を増した高山帯では高木の

生育は見られず、ハイマツ低木林が分布する。山頂付近は火山荒原となり、イワカガミ・コマクサなどの高山植物がカーペット状の群落を形成している。

こうした森林地帯の植物相を背景として、町内には大型獣のニホンツキノワグマ・ニホンカモシカ、中小型獣のホンダヌキ・ホンゴツネ・トウホクノウサギ・ホンドリス・ホンDOIタチ・オコジョ・ムササビ・ネズミ類・モグラ・ヤマネ・コウモリ類などの哺乳動物をはじめとする多様な動物が生息している。



第3図 蔵王町の東西模式断面と植生の垂直分布

2. 蔵王町の歴史的環境と遺跡の概況

(1) 歴史的環境

蔵王町と七ヶ宿町からなる刈田郡は、かつては白石市を含む宮城県南西部の広い地域を占めていた。この刈田・白石地方の地形が作り出す景観について「刈田郡誌」では「郡下到るところ連丘連山起伏し、谿谷溪流を見る。この一圓の水を聚めて阿武隈川に運ぶもの即ち水清く、石白き白石川にして、其本流支流に沿って、管内各村を往訪すべき諸道開けたり…」と記している(刈田郡教育会 1928)。

蔵王東麓の広大な山地・丘陵と、これを限なく開析する大小の河川は、多種多様な動植物を生息・生育させ、先史時代には人類の豊かな生活基盤となっていたことが濃密な遺跡分布から窺える。このような複雑な地形環境から、歴史時代には軍事上の要衝地域として数多くの城館が構築され、しばしば戦乱の舞台ともなったが、一方で土着の耕作者にとっては耕地が狭小である上に低地は洪水の常襲地帯で、時折集落や耕地の流失もあり、交通の難所でもあった。

刈田郡に関する最古の記録は、「続日本紀」に記された養老5年(721年)の陸奥国刈田郡建置に関する

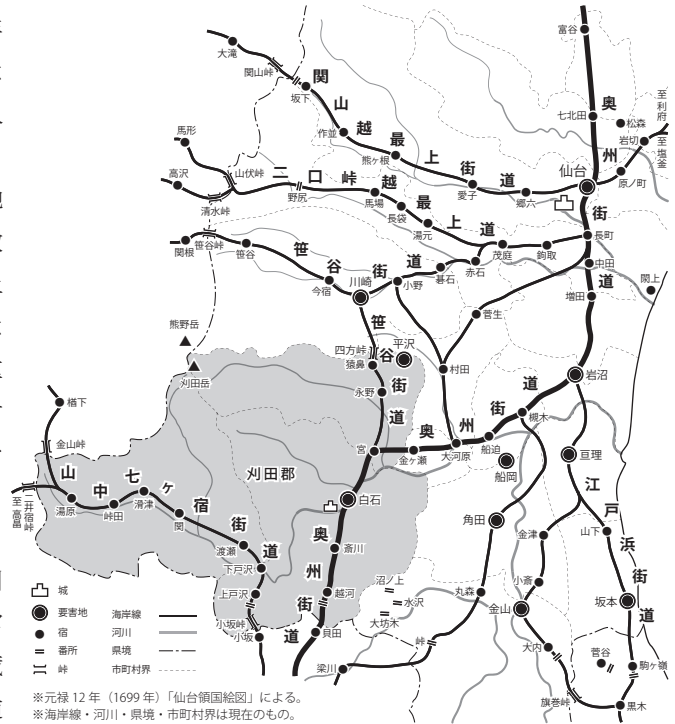
記事である。これによると刈田郡は柴田郡のうち二郷を分割して設置され、仙南地方では最も遅い建郡であった。陸奥国は7世紀半ばに亘理・伊具地方を北辺として成立し、7世紀後半頃には大崎平野周辺までその範囲を広げていたと考えられている。このため、柴田・刈田郡周辺は陸奥国成立後の早い段階で律令政府の安定した統治下に置かれていたであろう。

平安時代末期には奥州藤原氏の支配下にあったとみられ、丈六阿弥陀如来坐像を安置する阿弥陀堂が建立された。また、奥州合戦について「吾妻鏡」の伝えるところでは、文治5年(1189年)に藤原泰衡軍は刈田郡根無藤(蔵王町円田)に城郭を構え、四方坂(同平沢)との間で源頼朝軍と進退七度に及ぶ戦いの末に敗退したという。このことから、この地域が軍事上重要視されており、根無藤から四方坂を経る道筋が、出羽国へ至る出羽道の一部であったことが窺える。

鎌倉時代以降は白石氏(刈田氏)が刈田郡の中心勢力であった。白石氏は南隣の伊達郡を本拠とする伊達氏との関係が深く、戦国時代には伊達氏の傘下に組み込まれた。天正18年(1590年)に豊臣秀吉による

奥州仕置で刈田郡は伊達領と確定されたものの、翌年の再仕置で伊達政宗が岩出山城へ移封され、刈田郡は長井・信夫・伊達などの各郡とともに会津黒川城に入封した蒲生氏郷に与えられた。慶長3年（1598年）には蒲生氏に代わって会津に入封した上杉景勝の領地となり、家臣甘粕備後景継が白石城主となったが、政宗は慶長5年（1600年）に徳川家康の意を受けて上杉氏を押さえるため白石城を攻めて奪還し、刈田郡は仙台藩領となった。政宗は慶長7年（1602年）に重臣・片倉景綱を白石城主とし、藩境西南の固めを任せた。以後は代々片倉氏が白石城主を務め、江戸時代を通じて刈田郡の過半は片倉氏の知行地であった。

江戸時代には奥羽山脈を挟んで陸奥国を奥州街道、出羽国を羽州街道が縦貫しており、刈田郡内にも奥州街道が白石城下を通過していた。また、奥州街道の宮宿（蔵王町宮）から分岐して永野宿・猿鼻宿・四方峠（蔵王町円田）を経由し、笹谷峠を越えて山形の羽州街道へ抜ける笹谷街道も設けられていた（第4図）。

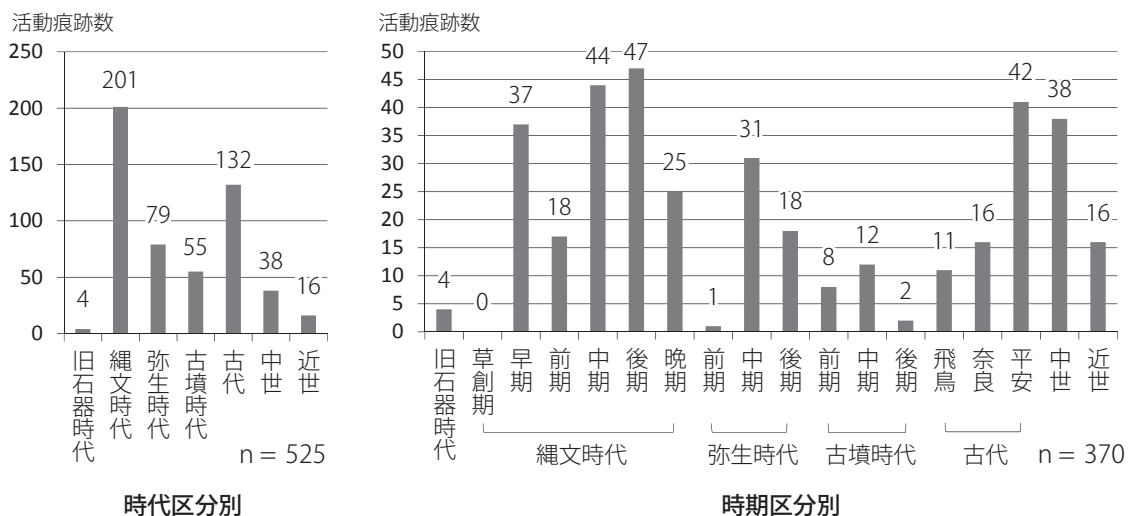


（2）遺跡の概況

蔵王町内における周知の遺跡は現在 201 か所を数える（第6・7図、第2表）。その多くは町域東部の平野・丘陵地帯に分布し、①青麻山東麓の丘陵と段丘上、②松川北岸の段丘と支流の高木川流域の丘陵上、③円田盆地に接する丘陵上に集中域を形成する。なお、町域西部の高原地帯では七日原扇状地の扇端部に少数の遺跡が分布する。これらの遺跡のほとんどは、複数の時代や時期区分に比定される活動痕跡が重複する複合遺跡であるが、時代や時期ごとの分布には一定の傾向が認められ、主に生業形態の変化を反映している。

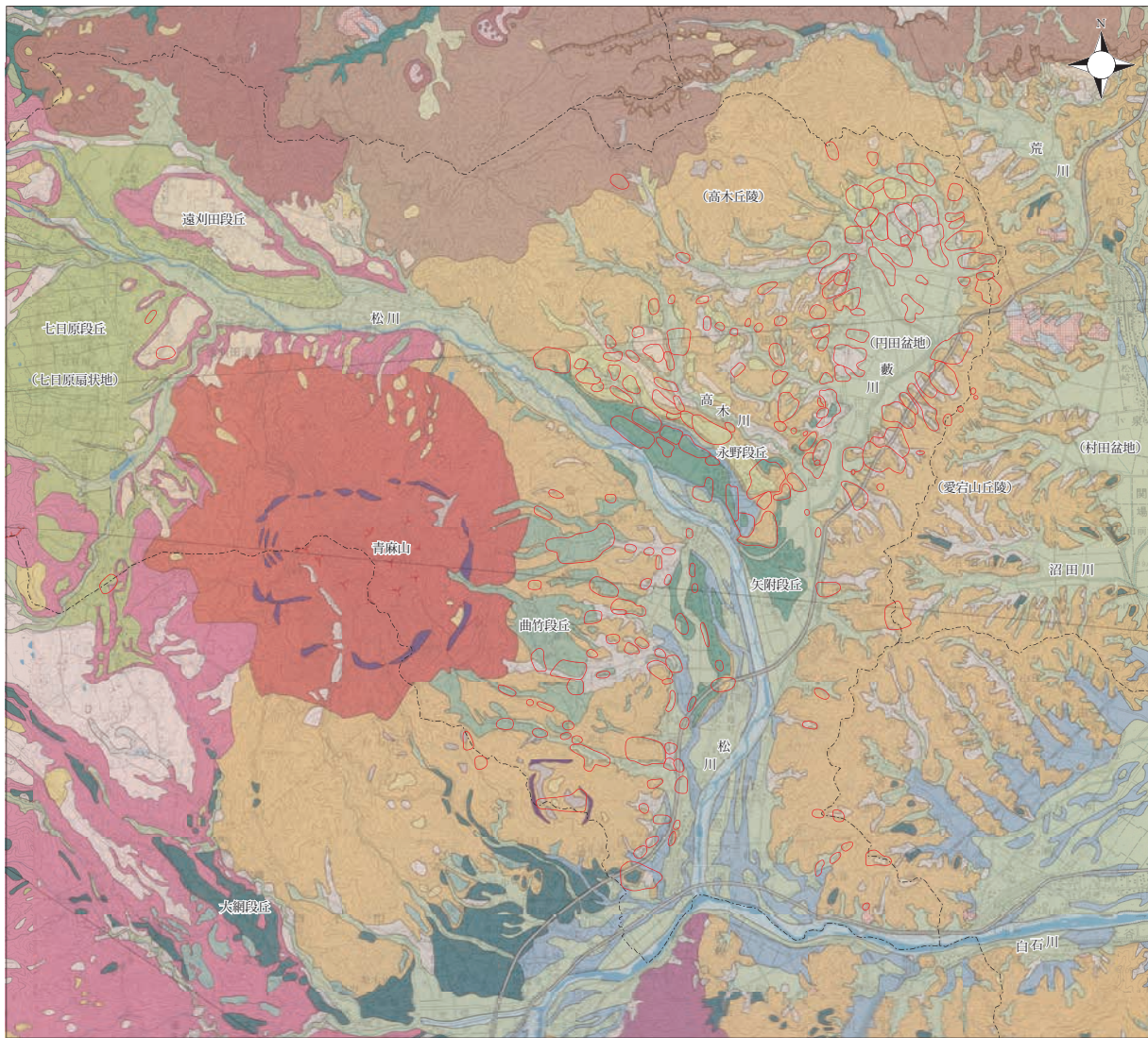
各遺跡に残された活動痕跡を時期区分別に集計するとその総数は 525 か所を数え、時代・時期ごとの人間活動の動態を窺い知ることができる（第5図）。

旧石器時代から縄文時代草創期にかけての活動は低調であるが、縄文時代早期になると激増する。前期には半減するが中期に再び増加傾向を示し、後期には活動痕跡が最多となる。晩期には再び半減し、弥生時代前期の活動は低調である。中期には回復するが、その後は段階的な減少傾向が見られ、古墳時代後期の活動は低調である。飛鳥時代以降、再び活動は活発化するが、平安時代の活動痕跡はほとんどが9世紀代に比



※各時代・時期区分の時間幅は均等ではない。※時期区分が不明な活動痕跡があるため、時期区分別の合計と時代別の合計は一致しない。

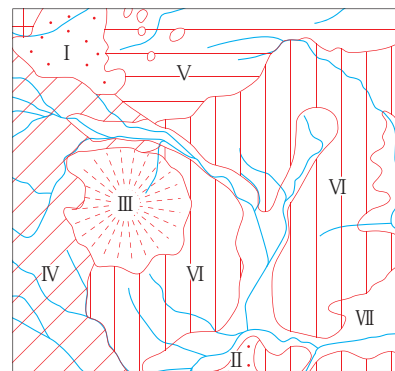
第5図 蔵王町の遺跡における活動痕跡の動態



- 山地及び丘陵地**
(蔵王火山)
- 山麓丘陵地
- (青麻火山)
- 山地
 - 尖頂峰
 - 火山性急崖
- (非火山性山地)
- 奥羽山脈の山地(峩々)
 - 大鳥谷山地
 - 山頂平坦地(大森付近)
 - 大萩山地
- (非火山性丘陵地)
- 高い丘陵地
 - 低い丘陵地
 - 頂部平坦地
 - 高位谷底
 - 旧火山性急崖
- 低地**
- 河岸平野・谷底平野
(後背湿地を区別した区域では自然堤防)
 - 後背湿地
 - 河原及び堤内地

- 台地及び段丘**
- 高位段丘
- (蔵王東麓段丘群)
- 火山泥流台地(弥治郎泥流台地)
 - 遠刈田段丘
 - 七日原段丘
 - 川原子段丘
 - 蔵本段丘
 - 大網段丘
- (松川段丘群)
- 永野段丘
 - 曲ヶ竹段丘
 - 矢附段丘
 - 低位段丘
- その他**
- 人工平坦地(主として切土による部分)
 - 人工平坦地(主として盛土による部分)
 - 支倉川流域と荒川流域の間の崖線
- 遺跡**
- 遺跡範囲(蔵王町内)
- 行政界**
- 市町の境界

1:100,000
2000m 0 2000 4000
(5万分の1 都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」)



- 地形区分図**
- I 大鳥谷山地
 - II 大萩山地
 - III 青麻火山
 - IV 蔵王山麓丘陵地
 - V 高い丘陵地
 - VI 低い丘陵地
 - VII 白石川河岸平野
- 行政区分図**
-

第6図 蔵王町の地形区分と遺跡の分布

定されるもので占められており、中世に入って13世紀代の活動痕跡が見られるようになるまでの期間は考古学的には空白期となっている。なお、前述のとおり12世紀には奥州藤原氏の影響下で阿弥陀堂が建立されたとみられる。近世に関しては周知の遺跡数は少ない現状にあるが、奥州街道の宮宿をはじめ街道筋を中心に活発な活動があった。

以下、各時代・時期における活動痕跡を概観する。

旧石器時代 ナイフ形石器が出土した持長地遺跡など、低位段丘上で4か所の活動痕跡が認められる。いずれも単独出土・採集資料のため、帰属時期や活動の内容には不明な点が多い。

縄文時代 青麻山東麓の丘陵・段丘上や松川北岸の段丘・丘陵上などに201か所の活動痕跡が認められる。

草創期は明確な活動痕跡が発見されていない。

早期は青麻山東麓の明神裏遺跡・上原田遺跡・沢入D遺跡、松川北岸の手代木遺跡・三本槻A遺跡、七日原扇状地の北原尾遺跡などがあり、比較的小規模とみられる活動痕跡が広範囲に点在する。明神裏遺跡は明神裏Ⅲ式（林1962）の標識遺跡である。

前期は青麻山東麓の上原田遺跡・長峰遺跡、松川北岸の西浦遺跡・上曲木B遺跡、七日原扇状地の七日原遺跡などがあり、青麻山東麓から松川北岸にかけての段丘上に多く分布する。

中期は青麻山東麓の上原田遺跡・二屋敷遺跡、松川北岸の谷地遺跡・寺門前遺跡・高木遺跡・鞘堂山遺跡・湯坂山B遺跡などがあり、松川北岸の段丘上に多く分布する。中期前半の谷地遺跡では住居跡14軒、貯蔵穴55基、遺物包含層などを確認している。土偶などを含む多量の遺物が出土し、拠点的な集落跡と考えられる。鞘堂山遺跡では中期中葉の住居跡5軒、貯蔵穴23基などを確認し、住居は貯蔵穴・柱穴群を囲むように配置されていた可能性がある。湯坂山B遺跡では中期後葉の住居跡17軒、貯蔵穴16基などを確認し、土笛などを含む多量の遺物が出土している。

後期は青麻山東麓の二屋敷遺跡・山田沢遺跡、松川北岸の西浦B遺跡などがあり、青麻山東麓の自然堤防上から松川北岸の段丘上に多く分布する。二屋敷遺跡では後期初頭～前葉の炉跡2基、土器埋設遺構2基、配石遺構1基などが確認されている。西浦B遺跡では広場を囲むように弧状に配置された後期初頭～前葉の建物跡23棟、貯蔵穴31基などを確認している。

晩期は青麻山東麓の下別当遺跡・願行寺遺跡・鍛冶沢遺跡などがあり、青麻山東麓の沢地形に面した段丘上に多く分布する。鍛冶沢遺跡では後期末～晩期末に

かけての土坑墓・土器埋設遺構・建物跡・住居跡などの遺構群が確認され、建物群は広場を囲むように弧状に配置されていた。また、鍛冶沢遺跡では中空土偶、願行寺遺跡では屈折土偶が採集されている。

弥生時代 79か所の活動痕跡が広範囲に点在する。

前期は明確な活動痕跡に乏しいが、青麻山東麓の鍛冶沢遺跡では、縄文時代晩期から継続する墓域で再葬墓が確認されている。

中期は松川北岸の西浦遺跡、円田盆地の大橋遺跡・立目場遺跡・都遺跡などがある。この時期になると、松川北岸から円田盆地にかけての丘陵・段丘・微高地上に多く分布するようになり、本地域における遺跡分布の大きな画期となっている。西浦遺跡は円田式（伊東1955）の標識遺跡である。都遺跡では籾殻圧痕のある土器片が出土している。

後期は円田盆地の愛宕山遺跡・天王遺跡・赤鬼上遺跡・磯ヶ坂遺跡などがあり、円田盆地の微高地から丘陵上にかけて多く分布する。

古墳時代 55か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上にほぼ限定され、一部が青麻山東麓の微高地上に分布する。

集落跡を見ると、前期は円田盆地の大橋遺跡・堀の内遺跡・伊原沢下遺跡・六角遺跡・愛宕山遺跡などがあり、丘陵尾根上に立地する。大橋遺跡は県内における塩釜式最古段階の集落跡で、住居跡3軒が確認されている。愛宕山遺跡は盆地底面との比高差90mを測る高所に立地し、住居跡・貯蔵穴を確認している。中期は円田盆地の中沢A遺跡・台遺跡・都遺跡・窪田遺跡などがあり、丘陵尾根・微高地上に立地する。中沢A遺跡は県内における南小泉式最古段階の集落跡で、住居跡9軒を確認している。台遺跡では盛土と筏地業による水田跡が確認されている。後期は円田盆地の窪田遺跡で陶器MT15型式期の須恵器が出土しているが、明確な活動痕跡は未確認である。

高塚・横穴古墳を見ると、円田盆地の丘陵上に夕向原古墳群・古峯神社古墳・宋膳堂古墳・天王古墳群・西脇古墳などが、青麻山東麓の松川・白石川の合流点付近の低丘陵上に明神裏古墳がある。夕向原1号墳は主軸長約57m、古峯神社古墳は主軸長約38mの前方後円墳、宋膳堂古墳は直径約35mの円墳である。昭和31年に発掘調査が行なわれた明神裏古墳では、凝灰岩板石を用いた箱式石棺が確認されている。

古代 132か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上に拠点的なものを含む活動痕跡が密集し、青麻山東麓から松川北岸にかけての

丘陵・段丘・微高地上の広範囲には比較的小規模とみられる活動痕跡が点在する。

飛鳥時代は塩沢北遺跡・十郎田遺跡・都遺跡・窪田遺跡などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。塩沢北遺跡では住居跡3軒が確認され、陶器TK217型式期の須恵器が出土している。十郎田遺跡では、材木堀による大規模な長方形区画施設と大溝跡、住居跡27軒、建物跡5棟などを確認し、出土した土器群には福島～関東地方との関係を窺わせるものが含まれている。また、都遺跡でも材木堀・大溝による区画施設と住居跡を確認している。

奈良時代は堀の内遺跡・六角遺跡・都遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡・前戸内遺跡などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。六角遺跡では大溝による区画施設と住居跡などを確認している。住居跡には短い煙道をもつカマドを付設するものがみられ、出土した土器群は福島～関東地方との関係を窺わせるものが主体的である。こうした土器群は円田盆地で多く確認され、移民を伴った外来集団の移入を示唆している。都遺跡では正方位の溝区画を伴う建物群を確認し、周辺で瓦も出土していることから寺院または官衙の可能性が考えられる。これらの活動痕跡の多くは奈良時代前半～中頃に位置づけられ、奈良時代後半の明確な活動痕跡は未確認である。

飛鳥～奈良時代の活動痕跡が円田盆地にほぼ限定されるのに対し、平安時代の活動痕跡は青麻山東麓から松川北岸にかけての地域を含めた広範囲に分布する。円田盆地では東山遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・赤鬼上遺跡・六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・戸ノ内脇遺跡、松川北岸では西浦B遺跡、青麻山東麓では観音堂山遺跡・青竹遺跡・二屋敷遺跡・下原田遺跡などがある。東山遺跡・西浦B遺跡・観音堂山遺跡・赤鬼上遺跡などでは、燃焼部から煙道までの全体を河原石で構築したカマドを付設する住居跡が確認されている。東山遺跡では土器溜遺構が確認され、「万田」などの墨書土器が多量に出土している。前戸内遺跡では、住居跡14軒、建物跡21棟などを確認している。集落内には建物跡が逆L字形に配置される一角があり、郷長・百姓クラスの豪族居宅と考えられる。「苺田」「草手」などの墨書土器が出土している。これらの活動痕跡の多くは平安時代前葉に位置づけられ、平安時代中葉以降の明確な活動痕跡は未確認である。なお、平安時代末葉には円田盆地の丘陵上に「丈六阿弥陀如来坐像」（県指定文化財）を安置した阿弥陀堂が建立されたとみられ、奥州藤原氏の関与が窺われる。現存する「平

沢弥陀の杉」（県指定天然記念物）は阿弥陀堂の参道杉並木として植えられたものと伝えられている。

中世 38か所の活動痕跡が確認されている。このうち15か所は城館跡で、青麻山東麓の松川に面した丘陵上、松川北岸の丘陵上、円田盆地西縁の丘陵上に分布する。また、城館跡の周辺を中心に段丘・微高地上で屋敷跡が確認されている。

城館跡は、青麻山東麓の宮城館跡・山家館跡・館の山城跡・曲竹小屋館跡、松川北岸の棚村館跡、円田盆地の矢附館跡・花桶館跡・築館館跡・兵衛館跡・西小屋館跡などがある。兵衛館跡は円田盆地最奥部にあり、丘陵頂部の平場を画する土塁・空堀が良好に残存する。西小屋館跡は円田盆地北部の微高地上にあり、土塁と水堀を伴う方形館である。

城館跡以外では、青麻山東麓の持長地遺跡・二屋敷遺跡、円田盆地の西屋敷遺跡・十郎田遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡などがある。持長地遺跡は山家館跡、西屋敷遺跡は西小屋館跡に隣接し、武士階級とみられる屋敷跡が確認されている。十郎田遺跡では屋敷跡の一角で多量の木製挽物荒型が出土し、屋敷内で木器生産が行われていたことが窺われる。

近世 16か所の活動痕跡が確認されている。円田盆地の車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡では、近世前半の屋敷跡、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡では近世中頃～後半の墓地在確認されている。宮ヶ内上遺跡では鉄滓が散布し製鉄遺跡とみられる。松川北岸の岩崎山金山跡では、江戸初期には仙台藩主伊達家の支配下で採掘が行なわれた。伊達家家臣の高野家が拝領した平沢要害は大正～昭和前期の珪藻土採掘により壊滅し主要部の遺構が現存しないが、「平沢要害屋敷絵図」には本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭的な構造が窺える。

現存する近世の建造物としては、青麻山東麓の我妻家住宅（江戸中期、国指定文化財）、刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、円田盆地の日吉神社本殿（江戸中期）、奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）などがある。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達郡より遷座され、刈田嶺神社は刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。

また、奥州街道の宮宿から分岐して出羽へ至る笹谷街道は町東部を南北に通過した。宮一永野宿間に曲竹一里塚（町史跡）が現存し、円田盆地西側の四方峠付近には古道の一部が保存されて往時を偲ばせている。

第2章 平成26年度の遺跡調査概要

1. 埋蔵文化財保護調整の概要

蔵王町内における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は現在201か所を数え、分布調査等による新規発見遺跡も随時追加されている。これらを文化財保護法に基づき適切に保護するため、農地転用および各種開発を行なう際には、事業者に対して埋蔵文化財との関わりについての確認を求め、関わりが予想される場合には宮城県教育委員会と連携して埋蔵文化財保存協議を実施している。協議においては、開発予定地の地下の遺構の有無が不明な場合には「遺構確認調査」、遺構面に影響を与えない工事や施工範囲が狭小な場合、遺構が存在する可能性が低い場合には「工事立会」を行ない、過去に発掘調査済みあるいは遺構が存在しないことを確認済みの場合には「慎重工事」としている。

さらに、遺構確認調査で遺構の分布が確認された場合には、必要に応じて事業者に対し計画の変更等を求め、遺跡の現状保存に努めている。また、事業主旨および

緊急性などから遺跡の破壊が避けられない場合には、事前に「緊急発掘調査（本発掘調査）」を行なって遺跡の記録保存を図ることとしている。

平成26年度の発掘届等の件数は28件で、文化財保護法93条に基づく届出23件、同94条に基づく通知5件である。事業内容別では道路3件、個人住宅5件、店舗1件、その他建物2件、電気等14件、農業基盤整備2件、遺跡整備1件で、回答内容別では発掘調査8件、工事立会13件、慎重工事7件である。昨年度の状況と比較すると、発掘届等の件数は13件(87%)の増加となっている。事業内容別では個人住宅等の動向に目立った変化は見られないが、その他建物として太陽光発電所建設が1件あった。太陽光発電所については、建設予定地と遺跡との関わりについての照合件数も増加しており、今後の動向を注視しながら円滑な調整を図っていく必要がある。

2. 埋蔵文化財調査の概要

平成26年度の埋蔵文化財保存協議で現場対応を行なったのは28件（第1表、述べ25遺跡）であった。対応の内訳は、遺構確認調査8件、工事立会10件、慎重工事10件である。

このうち確認調査1件（原遺跡）、工事立会1件（鍛冶屋敷・窪田遺跡）で遺構を確認した。

原遺跡の町道改良予定地は、周辺の過去の調査結果から住居跡などの遺構が分布する可能性が高いと予想された。事前協議の結果、生活道路の改良計画であり事業の必要性が高いことから、確認調査で遺構の存在が確認された場合、本発掘調査を実施して記録保存を図ることになった。調査の結果、竪穴住居跡4軒、溝跡5条、落とし穴状土坑3基、土坑9基などを確

認し精査を行なった。

鍛冶屋敷・窪田遺跡の暗渠排水工事立会では、暗渠管理設部で柱穴数基が確認されたが、工事による影響は及ばないことから現状保存とした。

また、遺構は確認していないが、確認調査2件（北割山遺跡、愛宕山遺跡）で少量の遺物が出土した。

北割山遺跡の太陽光発電所建設予定地では、遺跡南辺部に南西方向から入る谷地形を確認した。遺構確認面などから少量の遺物が出土した。

愛宕山遺跡の進入路・駐車場新設予定地では、既存道路の開削で旧地形が失われていることが判明した。攪乱層からごく少量の遺物が出土した。

第1表 平成26年度の埋蔵文化財保存協議にかかる確認調査・工事立会・慎重工事一覧

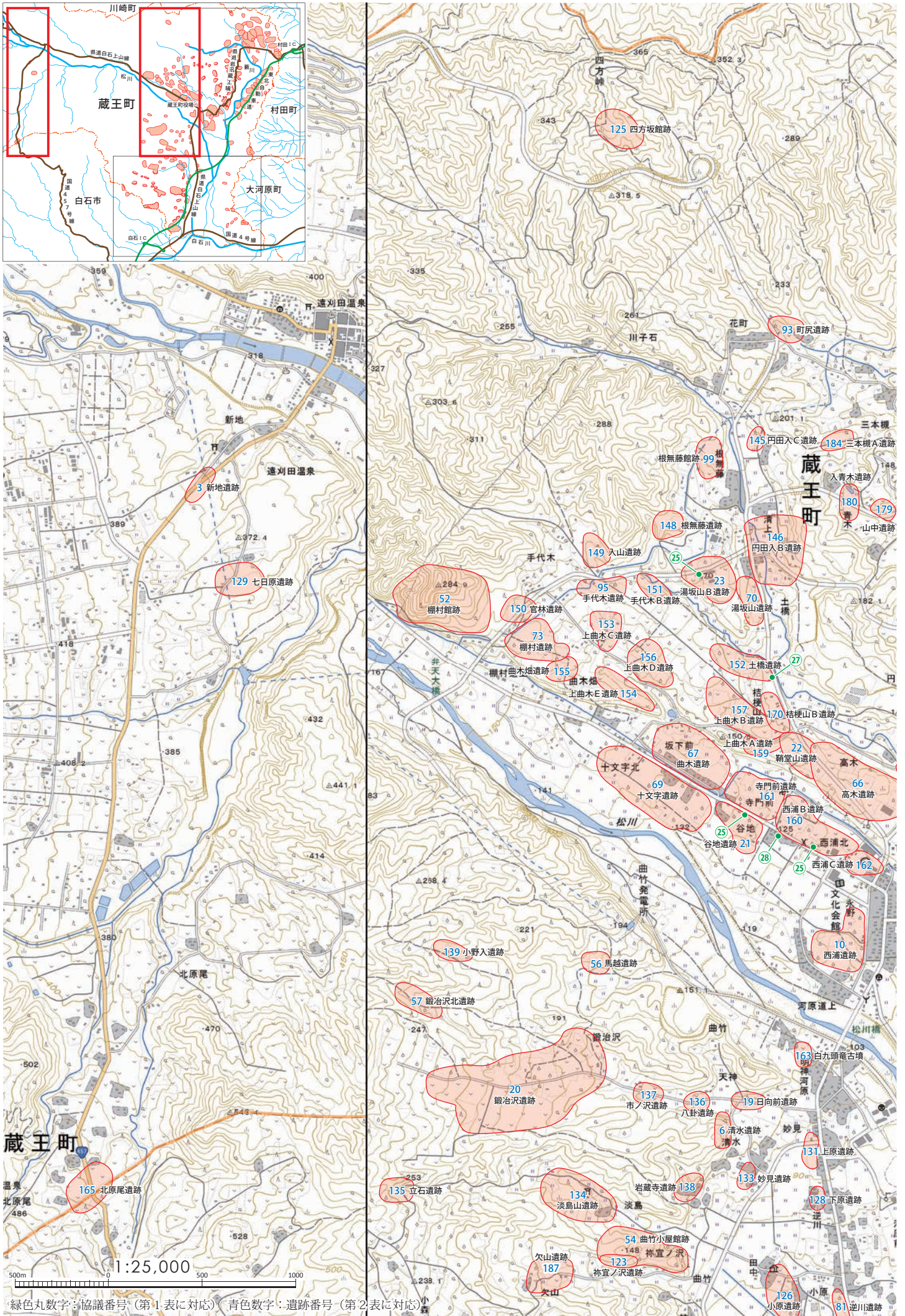
番号	遺跡番号	遺跡名	対応内容	協議箇所	調査原因	調査期間 (慎重工事：発掘届等の回答日)	対象面積	調査面積	遺構	主な調査成果 (旧地形・遺構確認/遺構/遺物)
1	07015	北岡山遺跡	確認調査	大字小村崎字山崎40-3	太陽光発電所建設	平成26年4月8・9日	10,222㎡	259.5㎡	無	南向斜面・谷地形/削平面/弥生土器・口 ク口土師器・土師器・不明土製品
2	05045	中沢A遺跡	確認調査	大字平沢字中沢17-14	個人住宅建築	平成26年4月9日	100㎡	14.4㎡	無	南向斜面/削平面
3	05114	鍛冶屋敷遺跡	慎重工事	大字小村崎字一ツ橋地内	電柱設置工事	平成26年4月16日	3.3㎡	-	-	-
4	05112 05193	鍛冶屋敷遺跡 六角遺跡 窪田遺跡	工事立会	大字小村崎地内	県営ほ場整備事業(円田2期 地区)暗渠排水工事	平成26年4月7・8・22日	146.6ha	-	有	鍛冶屋敷遺跡：湿地性黒色粘質シルト層/柱 穴敷基/六角遺跡：削平面/窪田遺跡：湿地 性黒色粘質シルト層/削平面/小柱穴敷基
5	05118	青竹遺跡	工事立会	宮字青竹地内	電柱設置工事	平成26年5月21日	7.5㎡	-	無	漸移層・礫混じりローム層
6	05118	青竹遺跡	工事立会	宮字青竹地内	電柱建替工事	平成26年5月21日	2.0㎡	-	無	漸移層・礫混じりローム層
7	05118 05192	青竹遺跡 船の山城跡	慎重工事	宮字青竹地内	電柱設置工事	平成26年7月2日	12.5㎡	-	-	-
8	05118 05120	青竹遺跡 後安寺遺跡	工事立会	大字曲竹字後安寺地内	電柱・支線設置工事	平成26年7月8日	11.5㎡	-	無	青竹遺跡：湿地性黒色粘質シルト層/後安寺 遺跡：砂礫混じりローム層
9	05203 05200	大久保西遺跡 稲荷林遺跡	工事立会	大字小村崎地内	県営ほ場整備事業(円田2期 地区)用水路改修工事	平成26年7月11日	108.3㎡	-	無	旧河川・水成砂礫層
10	05111	原遺跡	確認調査	大字小村崎字戸ノ内・原東地内	町道中ノ内隣ヶ坂線改良工事	平成26年9月3・4・8・10日、 10月1・9日	614㎡	450㎡	有	丘陵平坦面/削平面/竪穴住居跡4・溝跡5・ 落とし穴状土坑3・土坑9・柱穴7/土師器・ 口ク口土師器・須恵器・中世陶器・近世陶磁器
11	05018	下別当遺跡	慎重工事	宮字下別当地内	電柱設置工事	平成26年9月26日	4.0㎡	-	-	-
12	05080	小屋場遺跡	慎重工事	宮字下別当地内	電柱撤去工事	平成26年9月26日	1.7㎡	-	-	-
13	05018	下別当遺跡	慎重工事	宮字下別当地内	電柱撤去工事	平成26年9月26日	4.6㎡	-	-	-
14	05042	赤鬼上遺跡	確認調査	大字平沢字大橋14-1	納屋建築	平成26年11月17日	82.81㎡	12.8㎡	無	丘陵南向斜面/漸移層・ローム層
15	05012	愛宕山遺跡	確認調査	大字平沢字立目場81 愛宕神社境内	進入路・駐車場新設工事	平成26年11月17日	220㎡	177.8㎡	無	丘陵北西～南向斜面/削平面/土師器
16	05120	後安寺遺跡	工事立会	大字曲竹字後安寺地内	電柱・支線設置、撤去工事	平成26年11月21日	6.56㎡	-	無	礫混じりローム層
17	05077	戸ノ内脇遺跡	慎重工事	大字塩沢字戸ノ内脇25-10	個人住宅建築	平成26年12月5日	452.36㎡	-	-	-
18	05110	後原遺跡	工事立会	大字小村崎字後原51番1	個人住宅建築(住宅基礎部)	平成26年12月16日	399㎡	-	無	-
19	05092	中組遺跡	確認調査	大字円田字屋敷38-1	個人住宅建築	平成26年12月26日	211.02㎡	14.4㎡	無	埋没谷地形/湿地性黒色粘質シルト層
20	05110	後原遺跡	工事立会	大字小村崎字地内	電柱設置工事	平成27年1月13日	0.68㎡	-	-	黒ボク土層・削平面
21	05111	原遺跡	工事立会	大字小村崎字戸ノ内地内	電柱・支線設置、撤去工事	平成27年1月15日	3.8㎡	-	無	黒ボク土層
22	05018	下別当遺跡	慎重工事	宮字下別当地内ほか	電柱支柱・支線撤去工事	平成27年1月16日	2.64㎡	-	-	-
23	05100	小高遺跡	慎重工事	大字平沢字小高屋敷4-1地先	電柱支柱・支線設置工事	平成27年1月21日	0.01㎡	-	-	-
24	05110	後原遺跡	確認調査	大字小村崎字後原51番1	個人住宅建築(浄化槽部)	平成27年1月30日	399㎡	2.2㎡	無	削平面
25	05023 05021 05160	湯坂山B遺跡 谷地遺跡 西浦B遺跡	慎重工事	大字円田字湯坂山地内 大字円田字谷地76-2地内 大字円田字西浦北38-4地内	文化財説明板設置工事	平成27年2月13日	1.37㎡ 2.0㎡ 1.37㎡	-	-	-
26	05193	窪田遺跡	慎重工事	大字平沢字田中1番20	個人住宅建築	平成27年2月20日	62㎡	-	-	-
27	05152	土橋遺跡	工事立会	大字円田字桔梗山50-3地先	電柱接地極新設工事	平成27年3月18日	0.5㎡	-	無	-
28	05160	西浦B遺跡隣接地	確認調査	大字円田字谷地69-3	個人住宅建築	平成27年3月20日	436㎡	45.6㎡	無	段丘平坦面/黒ボク土層

※番号は調査日付順である(第7図の緑色丸数字に対応)。第3章で報告する調査は番号を太字で表記した。

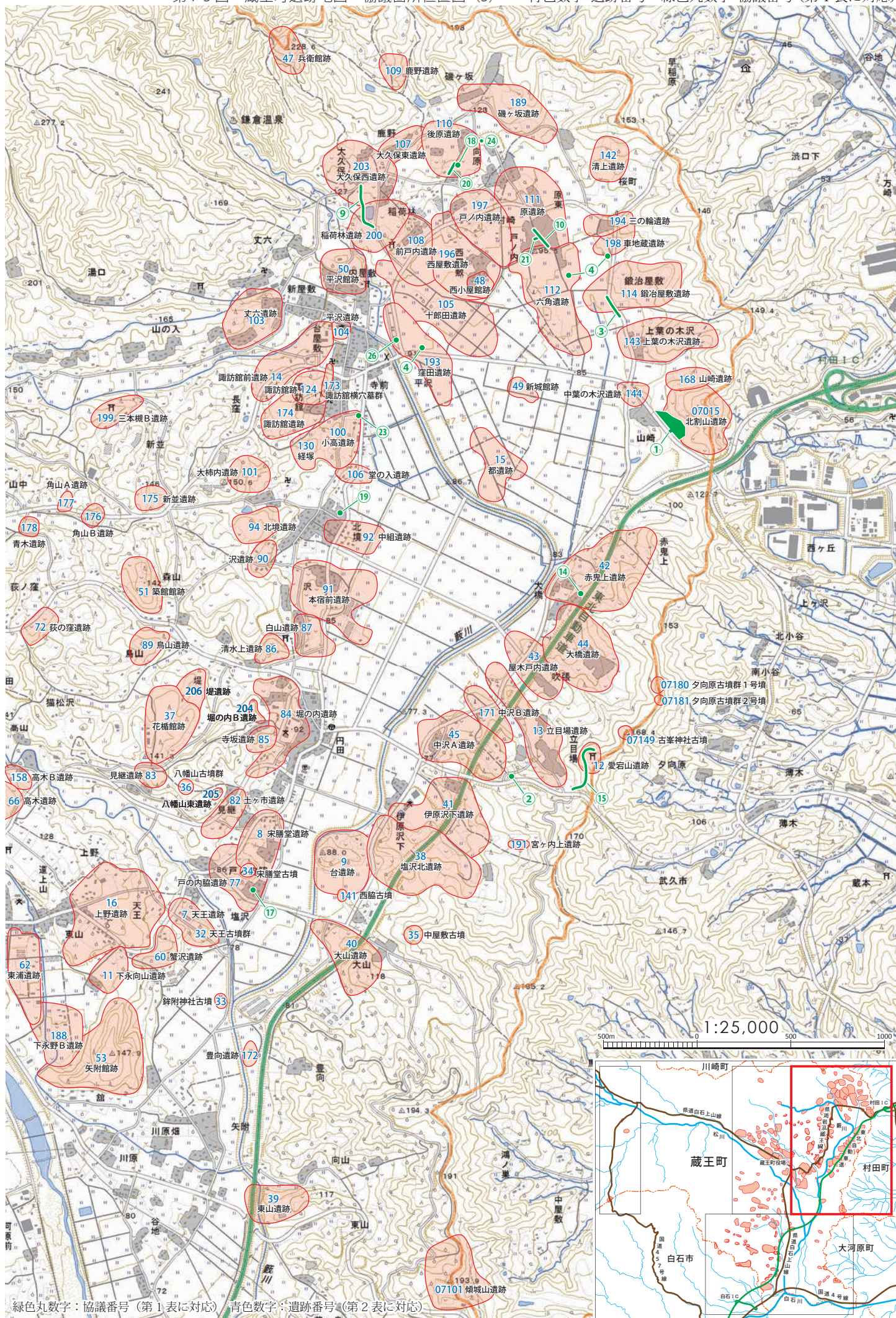
第7-1図 蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図(1)



第7-2図 蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図(2)



第7-3図 蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図(3) 青色数字:遺跡番号 緑色丸数字:協議番号(第1表に対応)



緑色丸数字:協議番号(第1表に対応) 青色数字:遺跡番号(第2表に対応)

第 2-1 表 蔵王町内遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	向上遺跡	散布地	古墳、古代	54	曲竹小屋館跡	城館	中世
2	上平遺跡	散布地	縄文、古代	56	馬越遺跡	散布地	縄文中
3	新地遺跡	散布地	古代	57	鍛冶沢北遺跡	散布地	縄文早・中～晩、古代
4	上原田遺跡	散布地	縄文早～後、古墳、古代	58	馬場北遺跡	散布地	縄文早、平安
5	長峰遺跡	散布地	縄文前・中、弥生中、古代	59	乙当地遺跡	散布地	旧石器、縄文早、平安
6	清水遺跡	散布地	縄文・弥生中	60	蟹沢遺跡	散布地	弥生中
7	天王遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中・後、古代	61	荒子遺跡	散布地	古代
8	宋膳堂遺跡	散布地	弥生中・後、古墳、平安	62	東浦遺跡	散布地	縄文中・後、弥生中、古墳、古代
9	台遺跡	散布地・水田	弥生中、古墳中・後、平安、中世・近世	63	内方遺跡	散布地	古代
10	西浦遺跡	集落・散布地	縄文早～後、弥生、古代	64	小山田遺跡	散布地	縄文、古代、中世
11	下永向山遺跡	散布地	縄文中、弥生中・後、古代	65	山田沢遺跡	散布地	縄文後～晩
12	愛宕山遺跡	散布地	弥生中・後、古墳前・中	66	高木遺跡	散布地	縄文中
13	立目場遺跡	散布地	縄文、弥生中・後、古墳	67	曲木遺跡	散布地	縄文中
14	識訪館前遺跡	集落・散布地	縄文晩、弥生、古墳前・中、平安	68	沢北遺跡	散布地	縄文後～晩、弥生中
15	都遺跡	集落	縄文後、弥生中・後、古墳前～後、飛鳥～平安、中世	69	十文字遺跡	散布地	縄文中
16	上野遺跡	散布地	縄文中、弥生中、平安	70	湯坂山遺跡	散布地	縄文中～晩
17	白ヶ久保入遺跡	散布地	縄文前・中、古代	71	沢入遺跡	散布地	縄文早・中・後、古代
18	下別当遺跡	散布地	縄文中～晩	72	荻の窪遺跡	散布地	縄文晩、弥生
19	日向前遺跡	散布地	縄文早・晩、古代	73	棚村遺跡	散布地	縄文後
20	鍛冶沢遺跡	散布地	縄文早・中～晩、弥生前・中、古代	74	遠森山下遺跡	散布地	縄文晩、古代
21	谷地遺跡	散布地	縄文中～晩	75	八幡平遺跡	散布地	縄文前・中、古代
22	鞆堂山遺跡	散布地	縄文中・後、弥生、古代	76	根方 A 遺跡	散布地	縄文後
23	湯坂山 B 遺跡	集落・散布地	縄文中～晩、弥生	77	戸の内脇遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中、古墳、平安、中世
24	宮城館跡	城館・散布地	古墳中、中世	78	中野 A 遺跡	散布地	縄文後、古代
26	明神裏遺跡	散布地・古墳	旧石器、縄文早・前、弥生中、古墳中、平安	79	下別当下遺跡	散布地	縄文後
27	西裏遺跡	散布地	縄文中、弥生中	80	小屋場遺跡	散布地	縄文後～晩
28	持長地遺跡	集落	旧石器、縄文前～後、弥生、古墳、古代、中世	81	逆川遺跡	散布地	縄文早・前
30	二屋敷遺跡	集落	縄文早・中～晩、平安、中世	82	土ヶ市遺跡	散布地	弥生、古代
31	下原田遺跡	集落	縄文前～晩、弥生後、平安	83	見継遺跡	散布地	縄文
32	天王古墳群	円墳	古墳	84	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文、弥生中・後、古墳前～後、奈良、平安
33	鉾附神社古墳	円墳	古墳	85	寺坂遺跡	散布地	平安
34	宋膳堂古墳	円墳	古墳	86	清水上遺跡	散布地	弥生、平安
35	中屋敷古墳	円墳	古墳	87	白山遺跡	集落・散布地	弥生、古墳中
36	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳	88	松ヶ沢遺跡	散布地	縄文後、古代
37	花楯館跡	城館	中世	89	鳥山遺跡	散布地	縄文中、古代
38	塩沢北遺跡	集落	弥生中・後、古墳中・後、飛鳥、平安	90	沢遺跡	散布地	古代
39	東山遺跡	集落	縄文早、平安	91	本宿前遺跡	集落・散布地	縄文早、弥生中、平安、中世
40	大山遺跡	集落	縄文早、弥生中、古墳前	92	中組遺跡	集落・散布地	縄文早・中、弥生、平安、中世、近世
41	伊原沢下遺跡	集落	古墳	93	町尻遺跡	散布地	縄文
42	赤鬼上遺跡	集落	弥生中・後、平安、中世	94	北境遺跡	散布地	縄文早、弥生後、古代
43	屋木戸内遺跡	散布地	弥生中、古代	95	手代木遺跡	散布地	縄文早、弥生
44	大橋遺跡	集落	縄文後、弥生中・後、古墳前、平安	96	東久保遺跡	散布地	古代
45	中沢 A 遺跡	散布地	縄文早、弥生中・後、古墳中・後、古代～中世	97	大久保遺跡	散布地	縄文中・後
46	山家館跡	城館	中世	98	大平山遺跡	散布地	縄文
47	兵衛館跡	城館	縄文、弥生、古代、中世	99	根無藤館跡	城館	中世
48	西小屋館跡	城館	平安、中世	100	小高遺跡	散布地	縄文、弥生、古代
49	新城館跡	散布地・城館	弥生、古墳後～古代、中世	101	大柿内遺跡	散布地	弥生
50	平沢館跡	城館	中世	102	定谷口遺跡	散布地	縄文後、古代
51	築館館跡	城館	中世	103	丈六遺跡	散布地	古代
52	棚村館跡	城館	中世	104	平沢遺跡	散布地	古代
53	矢附館跡	城館	中世	105	十郎田遺跡	散布地	縄文、古墳中～後、飛鳥～平安、中世、近世
				106	堂の入遺跡	散布地	弥生、古代、中世

第 2-2 表 蔵王町内遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
107	大久保東遺跡	散布地	古墳、奈良、平安	165	北原尾遺跡	散布地	縄文早
108	前戸内遺跡	散布地	旧石器、縄文後、弥生中・後、古墳中、奈良、平安、中世、近世	166	天王前遺跡	散布地	縄文、古代
109	鹿野遺跡	散布地	古代	167	根方 B 遺跡	散布地	古代
110	後原遺跡	散布地	縄文、古墳、奈良、平安	168	山崎遺跡	散布地	縄文早
111	原遺跡	散布地	古代	169	中野 B 遺跡	散布地	古代
112	六角遺跡	散布地	縄文早、弥生中・後、古墳前・後、奈良、平安、中世、近世	170	桔梗山 B 遺跡	散布地	縄文
114	鍛冶屋敷遺跡	散布地	縄文中～晩、古代、近世	171	中沢 B 遺跡	散布地	弥生中、古墳、古代
116	一本木遺跡	散布地	縄文中・後	172	豊向遺跡	散布地	古墳
117	櫛林遺跡	散布地	古代	173	諏訪館横穴墓群	横穴墓	古墳
118	青竹遺跡	散布地	縄文後、弥生後、平安、中世、近世	174	諏訪館遺跡	散布地	弥生、古墳
119	願行寺遺跡	散布地・寺院	縄文早・中・後、弥生中、古墳、中世	175	新並遺跡	散布地	縄文中
120	後安寺遺跡	散布地	古代	176	角山 B 遺跡	散布地	縄文
121	若神子山遺跡	散布地	縄文後	177	角山 A 遺跡	散布地	古代
122	足の又遺跡	散布地	縄文晩	178	青木遺跡	散布地	平安
123	称宜ノ沢遺跡	散布地	縄文後	179	山中遺跡	散布地	平安
124	諏訪館跡	城館	中世	180	入青木遺跡	散布地	縄文
125	四方坂館跡	城館	中世	183	沢入 B 遺跡	散布地	縄文後
126	小原遺跡	散布地	縄文晩、平安	184	三本槻 A 遺跡	散布地	縄文早
128	下原遺跡	散布地	縄文中	185	遠森山遺跡	散布地	縄文晩?
129	七日原遺跡	散布地	縄文前	186	沢入 C 遺跡	散布地	縄文
130	経塚	経塚	中世	187	欠山遺跡	散布地	縄文
131	上原遺跡	散布地	縄文後	188	下永野 B 遺跡	散布地	奈良、平安
133	妙見遺跡	散布地	縄文晩	189	磯ヶ坂遺跡	散布地	奈良、平安
134	淡島山遺跡	散布地	縄文後、古代	190	若神子山 B 遺跡	散布地	縄文前・後
135	立石遺跡	散布地	縄文後	191	宮ヶ内上遺跡	製鉄	近世
136	八卦遺跡	散布地	縄文後	192	館の山城跡	城館	中世
137	市ノ沢遺跡	散布地	弥生、古代	193	窪田遺跡	集落・散布地	縄文、弥生後、古墳中・後、飛鳥～平安、中世
138	岩蔵寺遺跡	散布地	縄文晩、古代	194	三の輪遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
139	小野入遺跡	散布地	縄文早・中～晩、古代	196	西屋敷遺跡	集落	縄文、奈良、平安、中世、近世
141	西脇古墳	円墳	古墳	197	戸ノ内遺跡	集落	縄文、弥生、飛鳥～平安、中世
142	清上遺跡	散布地	古代	198	車地蔵遺跡	散布地	古代、中世、近世
143	上葉の木沢遺跡	散布地	古代	199	三本槻 B 遺跡	散布地	縄文、平安
144	中葉の木沢遺跡	散布地	縄文、弥生、古代	200	稲荷林遺跡	散布地	縄文早、古墳～平安
145	円田入 C 遺跡	散布地	縄文	201	沢入 D 遺跡	散布地	縄文早・晩
146	円田入 B 遺跡	散布地	縄文早・中	202	観音堂山遺跡	散布地	縄文後、平安
148	根無藤遺跡	散布地	縄文早・晩、古代	203	大久保西遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
149	入山遺跡	散布地	縄文前、弥生、古代	204	堀の内 B 遺跡	散布地	弥生、古墳
150	官林遺跡	散布地	縄文早	205	八幡山東遺跡	散布地	弥生、古代
151	手代木 B 遺跡	散布地	縄文早・後、古代	206	堤遺跡	散布地	縄文、弥生、古墳、古代、中世
152	土橋遺跡	散布地	縄文後、弥生	02092	井戸遺跡	散布地	縄文前・中、古代
153	上曲木 C 遺跡	散布地	縄文早・中	02429	炭の平遺跡	散布地	縄文早・前
154	上曲木 E 遺跡	散布地	縄文前・中	07015	北割山遺跡	散布地	縄文、弥生
155	曲木畑遺跡	散布地	縄文	07101	傾城山遺跡	散布地	縄文
156	上曲木 D 遺跡	散布地	縄文前・中	07149	古峯神社古墳	前方後円墳	古墳
157	上曲木 B 遺跡	散布地	縄文早～中、古代	07180	夕向原 1 号墳	前方後円墳	古墳
158	高木 B 遺跡	散布地	縄文	07181	夕向原 2 号墳	円墳	古墳
159	上曲木 A 遺跡	散布地	縄文早、弥生、古代				
160	西浦 B 遺跡	集落・散布地	縄文中～晩、弥生、平安、中世、近世				
161	寺門前遺跡	散布地	縄文中・後				
162	西浦 C 遺跡	散布地	縄文前～後、弥生、奈良、平安				
163	白九頭竜古墳	古墳	古墳				
164	沢北 B 遺跡	散布地	縄文後				

(合計 201 か所)

※番号は宮城県遺跡登録番号のうち、蔵王町の市町村番号 05 を省略した下三桁を記載した(欠番は省略。第 7 図に記載した青色数字に対応)。
 ※五桁で記載した番号のうち 02 で始まるものは白石市、07 で始まるものは村田町登録分である。蔵王町の行政界にまたがるもののみを記載した。
 ※平成 26 年度に現場対応を実施した遺跡(第 1 表)は番号を太字で表記した。

第3章 調査の成果

第1節 緊急発掘調査

1. 原遺跡

調査要項（第1表10）

遺跡名：原遺跡（遺跡登録番号 05111）
 調査原因：町道中ノ内磯ヶ坂線改良事業計画
 調査箇所：蔵王町大字小村崎字原東、字戸ノ内地内
 調査期間：平成26年9月3日～10月18日
 対象面積：614m²（うち工事予定範囲：467m²）
 調査面積：450m²
 調査主体：蔵王町教育委員会
 調査員：佐藤洋一・鈴木雅・庄子善昭・
 渡邊香織・我妻なおみ・江尻祥子
 調査協力：蔵王町建設課・小村崎区

遺跡の概要

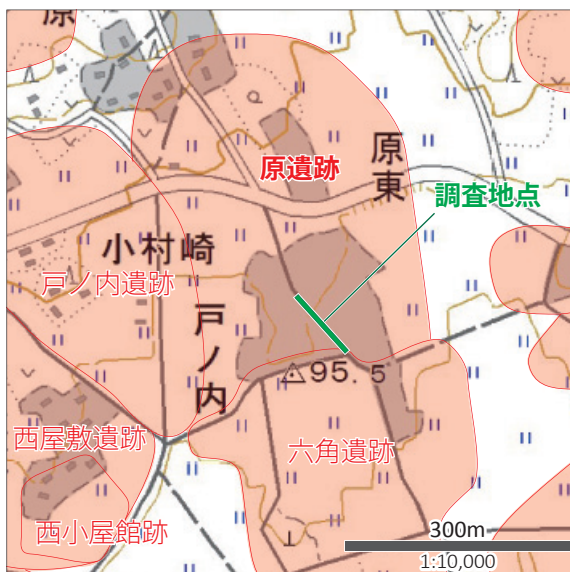
円田盆地北西縁の高木丘陵から盆地中央部に向かって南東方向に長く張り出す低平な舌状丘陵上に立地する。地形的に連続する南側の丘陵先端部には六角遺跡が隣接する。丘陵の両裾は沢地形または盆地底面の湿地で画され、狭い埋没谷地形を挟んだ西側には戸ノ内遺跡が隣接している。遺跡の現況は畑地・水田・宅地などで、地表面に古代の土器片などの散布が見られる。

本遺跡では平成14年度以降、県営ほ場整備事業（円田2期地区）に伴う発掘調査（宮城県教育委員会2003、町4・17集）が行なわれ、東部の丘陵辺縁部

で落とし穴状土坑群、低地で古代の水田跡、南部の丘陵平坦面で古墳時代前期の竪穴住居跡1軒を確認している。また、南側に隣接する六角遺跡の丘陵平坦面では古墳時代前期、奈良時代前半、平安時代初頭の集落を確認している（町6・17集）。

調査に至る経緯

町道中ノ内磯ヶ坂線の未改良区間は幅員2.0mと狭く、車両の通行に支障を来たしていた。このため、未改良区間の延長100mを幅員5.0mに拡幅し、排水側溝を設置する改良工事が計画された。事業予定地は原遺跡の範囲に含まれていたことから、町道改良計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が平成26年3月3日付けで蔵王町長より蔵王町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出された。協議の結果、これまでの周辺の調査結果から事業予定地には住居跡などの



第8図 調査地点位置図



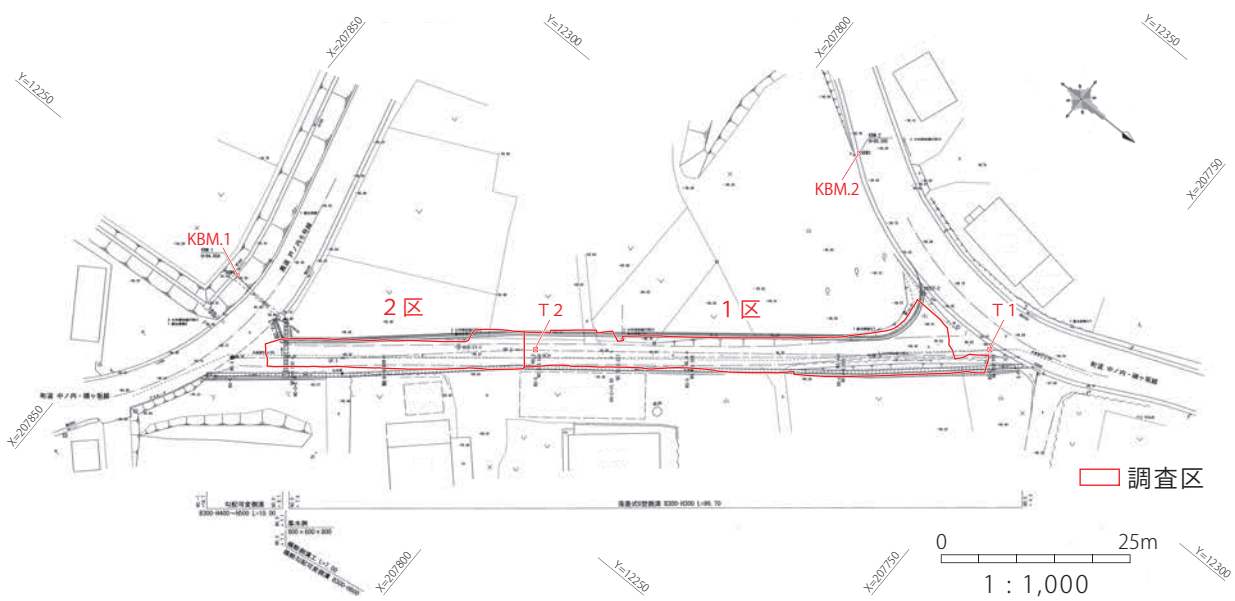
写真1 調査前現況（北西から）



写真2 調査前現況（南東から）

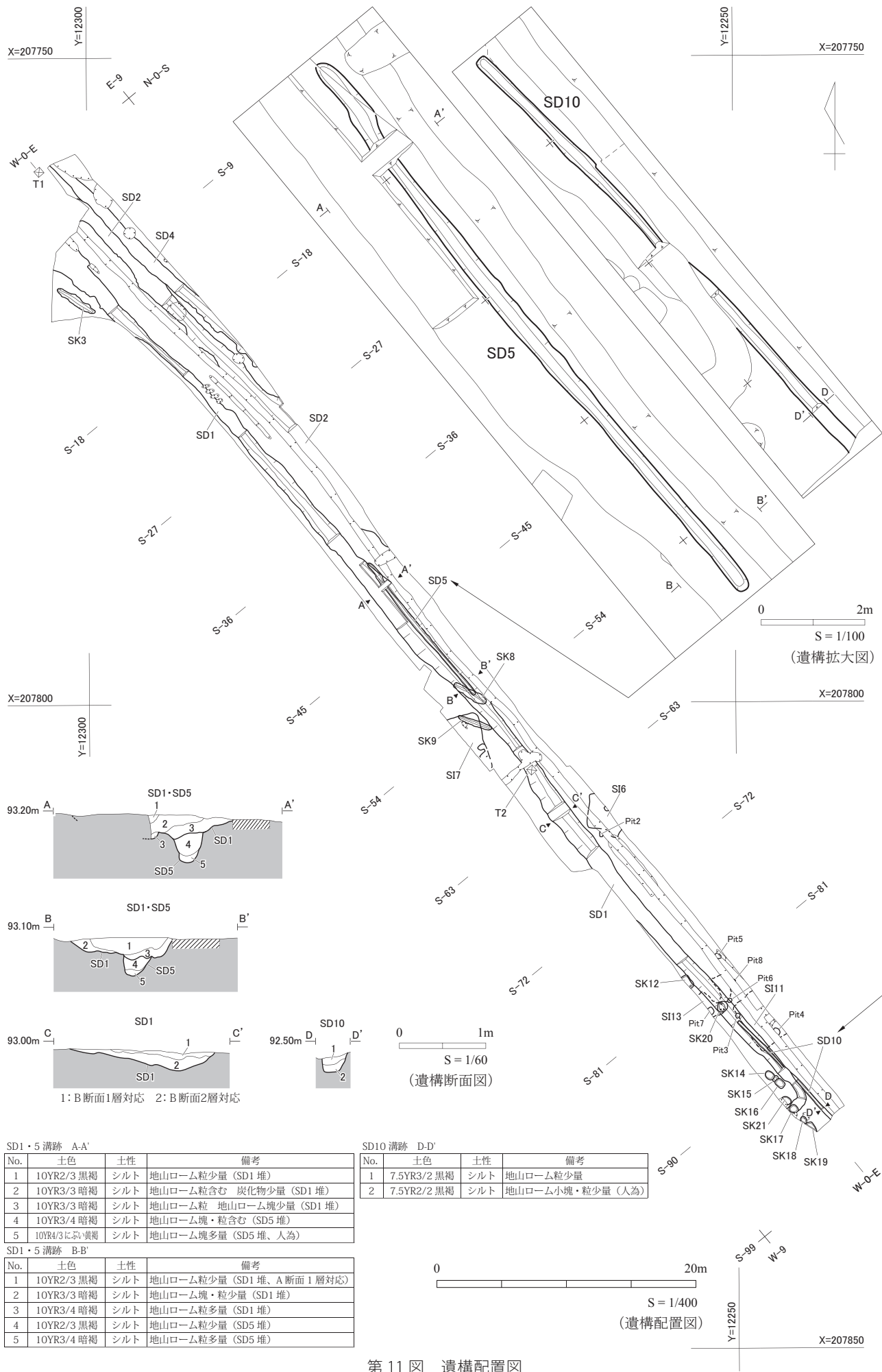


第9図 調査区配置図



KBM.1 : 94.050m KBM.2 : 96.585m T 1 (No.5) : X=-207758.094, Y=-12302.987 T 2 (No.2) : X=-207804.552, Y=-12265.019

第10図 調査区設定図



SD1・5 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム粒少量 (SD1 堆)
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム粒含む 炭化物少量 (SD1 堆)
3	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム粒 地山ローム塊少量 (SD1 堆)
4	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム塊・粒含む (SD5 堆)
5	10YR4/3 灰黄褐	シルト	地山ローム塊多量 (SD5 堆、人為)

SD10 溝跡 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR3/2 黒褐	シルト	地山ローム粒少量
2	7.5YR2/2 黒褐	シルト	地山ローム小塊・粒少量 (人為)

SD1・5 溝跡 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム粒少量 (SD1 堆、A断面1層対応)
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム塊・粒少量 (SD1 堆)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム粒多量 (SD1 堆)
4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム粒少量 (SD5 堆)
5	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム粒多量 (SD5 堆)

第11図 遺構配置図

遺構が分布する可能性が高いと予想されるが、生活道路の改良であり事業の必要性が高いことから、遺構確認調査を実施して遺構の存在が確認された場合、本発掘調査を実施して記録保存を図ることで合意した。県教育委員会からは同年3月7日付けで確認調査を実施する必要があるとの回答書が出された。その後、工事実施に先立ち同年7月17日付けで文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が蔵王町長より町教育委員会経由で県教育委員会へ提出され、県教育委員会からは同年7月25日付けで工事着手前の発掘調査実施が通知された。発掘調査は9月3日から10月18日までの22日間を要した。

調査の成果

①調査区周辺の地形

舌状丘陵上の平坦面にあたり、南東方向に緩く傾斜する（第8図）。発掘調査は工事予定範囲467m²を対

象とし、民家出入口を確保する必要から北西側（1区）と南東側（2区）に分割し反転して調査を実施した（第9図）。最終的な発掘調査面積は、安全上の理由から掘削できなかった調査区両端の取り付け部を除いた約450m²である（第10図）。調査区の表土除去を行なったところ既設道路の舗装・路盤材碎石層の直下に黄褐色ロームの削平面が露出し、これを遺構確認面とした。遺構確認面の標高は南東側に向かって低く、約95m離れた調査区北西端と南東端で約1.4mの比高差がある。

②発見された遺構と遺物

遺構は竪穴住居跡4軒、溝跡5条、落とし穴状土坑3基、土坑9基、柱穴7か所を確認した（第11図）。遺物は土師器、ロクロ土師器を主体に、須恵器、弥生土器、陶磁器などが出土した。以下、確認した遺構・遺物について詳述する。



写真3 遺構確認作業（1区、南東から）



写真4 遺構確認作業（1区、SI11 竪穴住居跡）



写真5 遺構確認作業（2区、北から）



写真6 遺構記録作業（1区、SK3 落とし穴状土坑）



写真7 調査区全景（1区、北西から）



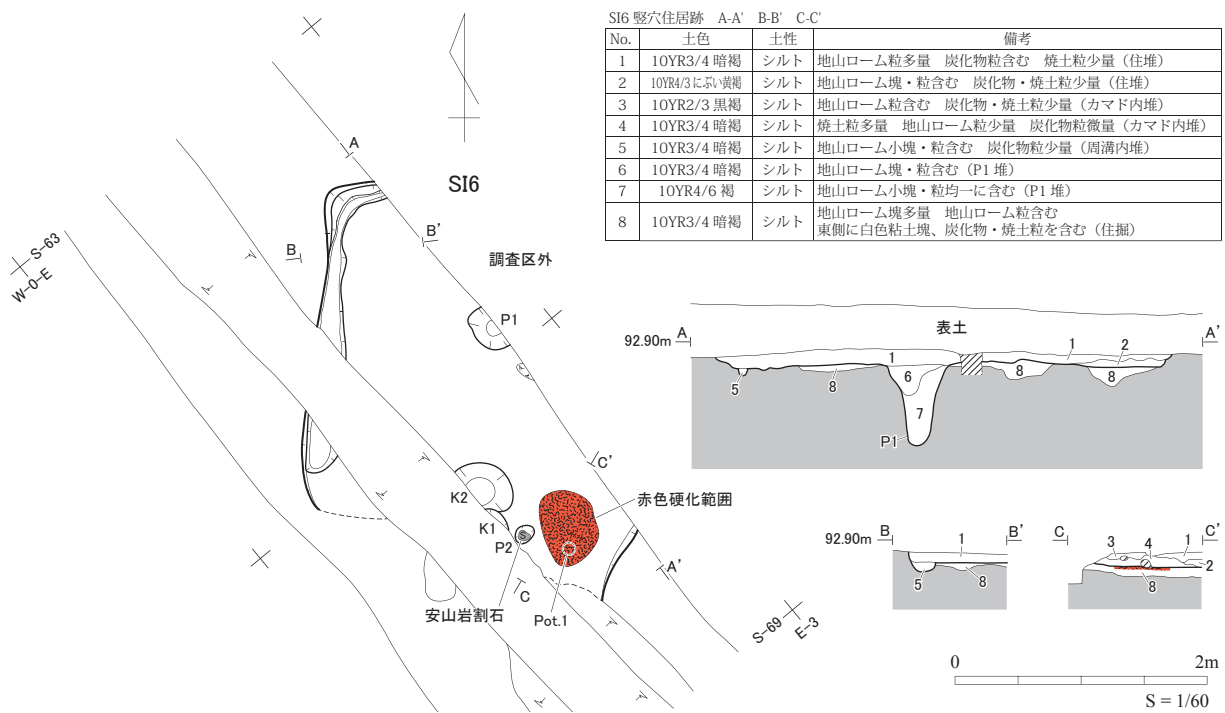
写真8 調査区全景（1区、南東から）



写真9 調査区全景（2区、北西から）



写真10 調査区全景（2区、南東から）



第12図 SI6 竪穴住居跡



写真11 SI6 竪穴住居跡床面 (北から)



写真12 SI6 竪穴住居跡カマド痕跡周辺



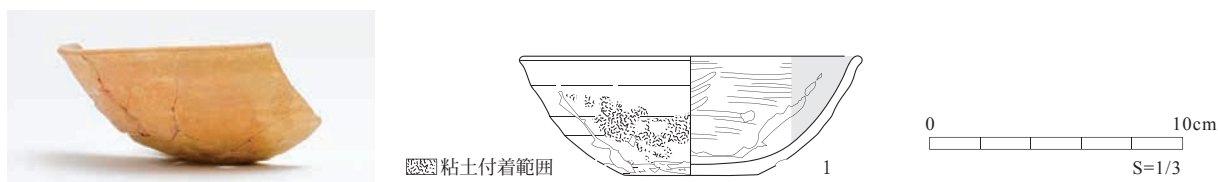
写真13 SI6 竪穴住居跡遺物出土状況



写真14 SI6 竪穴住居跡断面 (北東から)



写真15 SI6 竪穴住居跡 P1 柱穴断面



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI6	焼面直上 Pot.1	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ、(底) 手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理 (二次被熱により消失) ※外面に粘土付着	(13.6)	(5.4)	4.8	1/4	UF14-1

第13図 SI6 竪穴住居跡出土遺物

A. 竪穴住居跡

【SI6 竪穴住居跡】(第12・13図、写真11～15)

〔位置〕調査区中央部

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸2.70m以上、短軸2.65m以上の隅丸方形とみられ、北東側が調査区外へ延びている。

〔方向〕住居西辺：N - 5° - E

〔壁面〕地山を壁として床面から外傾して立ち上がる。残存壁高は最大10cmである。

〔床面〕住居掘方埋土で構築され、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕床面を覆う堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積土である。

〔柱穴〕住居中央やや北寄りの床面で柱穴1か所(P1)を確認した。掘方の平面形は長軸40cm以上、短軸18cm以上の楕円形とみられ、深さ63cmである。柱材は抜き取られており柱痕跡は確認されなかった。

〔周溝〕住居北西コーナー部から西辺に沿って周溝を確認した。幅10～30cm、深さ8～10cmで、堆積土は自然堆積土である。

〔カマド〕住居南東部で床面の赤色硬化を確認した。長軸60cm、短軸32cmの楕円形で、住居南壁東寄りに付設されたカマド燃焼部の痕跡と考えられる。側壁は残存しないが、赤色硬化範囲の西側に安山岩分割礫を据えた小柱穴(P2)を確認した。側壁の骨材または焚口構築材とした可能性が考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南辺中央付近で重複する土坑2基(K2→K1)を確認した。位置・形状から貯蔵穴と考えられる。K1は平面形が長軸28cm以上、短軸5cm以上の楕円形とみられ、深さ20cmである。堆積土は1層で自然堆積土である。K2は長軸52cm、短軸30cm以上の楕円形で、断面形は深さ30cmの皿状を呈する。堆積土は1層で焼土・白色粘土塊からなり人為的埋土である。

〔遺物〕カマド燃焼部底面の痕跡と考えられる赤色硬化範囲の直上でロクロ土師器坏(第13図)が出土した。

このほか、住居内堆積土などからロクロ土師器坏・甕、土師器小型品・甕などが出土した。ロクロ土師器坏は内外面に黒色処理を施すものがある。

【SI7 竪穴住居跡】(第14～16図、写真16～21)

〔位置〕調査区中央部

〔重複〕SK9→SI7

〔規模・形状〕平面形は長軸4.5m以上、短軸2.4m以上の隅丸方形とみられ、南西側が調査区外へ延びている。

〔方向〕住居東辺：N - 13° - W

〔壁面〕地山を壁として床面からほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は最大19cmである。

〔床面〕掘方埋土で構築され、ほぼ平坦である。住居中央部から南壁にかけての長軸250cm以上、短軸75cm以上の範囲で床面の硬化が見られた。

〔堆積土〕床面を覆う堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積土である。

〔柱穴〕なし

〔周溝〕なし

〔カマド〕住居東壁南寄りに付設する。燃焼部は幅100cm、長さ80cmで、底面が赤色化している。燃焼部底面・側壁を黄褐色ローム・白色粘土塊を多く含む暗褐色シルトで構築し、側壁の骨材として扁平な河原石・割石を用いている。側壁は幅40cm、奥行60cm、高さ10cmが残存する。左側壁(14層)が住居掘方底面、右側壁(10層)が底面の構築土(12層)の上に構築されており、部分的な再構築または燃焼部の構築手順を示している可能性がある。また、左右側壁の先端で小柱穴2か所(P1・2)を確認した。平面形は直径18～25cmの円形を呈し、深さ7～9cmである。側壁の骨材または焚口構築材の据方の可能性が考えられる。焚口幅は小柱穴芯々で68cmとなる。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東隅で土坑1基(K1)を確認した。位置・形状から貯蔵穴と考えられる。平面形が長軸105cm、短軸55cmの楕円形で、断面形は深さ30cmの播鉢状を呈する。堆積土は5層に細分され、いずれも自然堆積土ないしは崩落土である。堆

積土下層からロクロ土師器坏4個体が出土した。

〔遺物〕床面直上でロクロ土師器坏(第15図1)・小型甕(第16図3)、カマド底面構築土(12層)からロクロ土師器小型甕(第16図1)、土師器甕(第16図4)、カマド内堆積土から須恵器坏(第15図10)、住居内堆積土からロクロ土師器坏(第15図4~5・7・9)・小型甕(第16図2)、K1貯蔵穴堆積土からロクロ土師器坏(第15図2・3・6・8)が出土した。ロクロ土師器坏には外面に墨書「吉」(第15図5)、習書と考えられる墨書「是か」、「大か」、「大大大」(第15図9)が見られる。

このほか、住居内堆積土などからロクロ土師器坏・甕、土師器小型品・甕、不明土製品などが出土した。

【SI11 竪穴住居跡】(第17~20図、写真22~28)

〔位置〕調査区南部

〔重複〕SI11 → P3・P4・SD1・SD10

〔規模・形状〕平面形は長軸4.2m、短軸2.3m以上の隅丸方形とみられ、北東側が調査区外へ延びている。

〔方向〕住居南東辺: N - 52° - E

〔壁面〕残存しない

〔床面〕住居掘方埋土で構築され、わずかに南東側に向かって傾斜する。床面直上に焼土・炭化木片の散布が見られ、土師器鉢・器台・壺各1個体、甕4個体

が出土した。住居の焼失に伴うものの可能性がある。〔堆積土〕床面を覆う堆積土は1層で、自然堆積土である。

〔柱穴〕重複する新しい遺構として扱った柱穴2か所(Pit3・4)は、住居掘方埋土を掘り込んでいる。堆積土はPit3で黄褐色ローム塊・粒を含む黒褐色シルト、Pit4で焼土・炭化物塊を含む黒褐色シルトである。住居に伴う可能性があるが、柱穴上面を覆う住居内堆積土の層厚が薄く明確にできなかった。

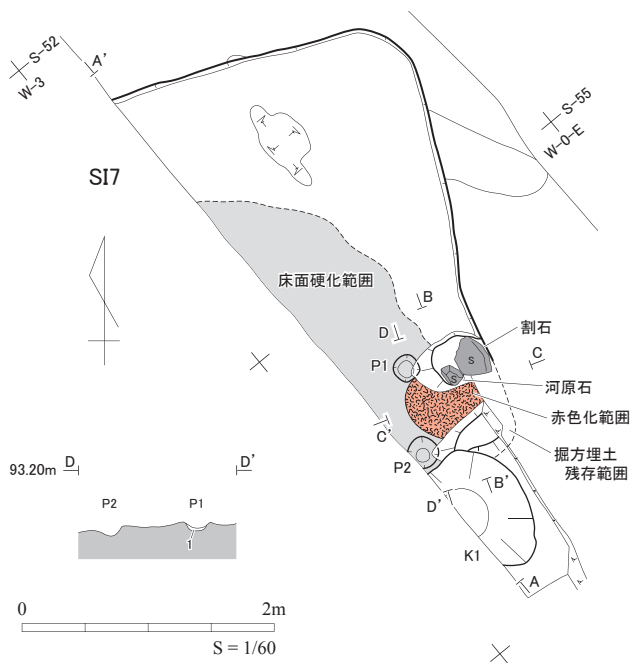
〔周溝〕なし

〔炉〕不明

〔貯蔵穴〕住居南東壁寄りで土坑1基(K1)を確認した。平面形が長軸55cm、短軸50cmの楕円形で、断面形は深さ60cmのU字形を呈する。堆積土は3層に細分(2~4層)され、いずれも自然堆積土である。3層は炭化物を多く含み、土師器鉢が出土した。

〔遺物〕床面直上で土師器鉢(第18図1)・器台(第18図3)・壺(第18図4)・甕(第19・20図)、K1堆積土(3層)から土師器鉢(第18図2)が出土した。

このほか、住居内堆積土などから土師器小型品・甕、弥生土器などが出土した。土師器小型品は内外面にヘラミガキ調整の後、赤彩を施すものがある。



SI6 竪穴住居跡 A-A' B-B' C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム小塊・粒(住堆)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	地山ローム塊多量 地山ローム粒を含む(住堆)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	焼土粒多量 地山ローム粒を含む 地山ローム小塊微量(K1堆)
4	10YR4/3 赤黄褐	シルト	地山ローム粒多量 地山ローム小塊少量(K1堆)
5	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム粒、暗褐色シルト塊多量 焼土粒微量(カマド内・K1堆)
6	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム・焼土粒多量(カマド内堆)
7	10YR3/4 暗褐	シルト	焼土粒多量 地山ローム粒少量(カマド内堆)
8	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム小塊・粒少量 焼土粒微量(K1堆)
9	10YR4/6 褐	シルト	地山ローム塊主体(K1堆)
10	10YR3/4 暗褐	シルト	白色粘土塊、地山ローム小塊多量 焼土含む(カマド新側壁構)
11	10YR4/4 褐	シルト	地山ローム塊・粒多量 白色粘土塊少量(住堆)
12	5YR3/6 暗赤褐	シルト	焼土塊・粒多量 地山ローム塊微量(カマド底面構)
13	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム小塊・粒多量(住堆)
14	10YR3/4 暗褐	シルト	白色粘土塊・地山ローム小塊多量 焼土粒含む(カマド旧側壁構)
15	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム塊・粒多量 焼土粒微量(住堆)
16	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム粒少量(住堆)
17	10YR4/6 褐	シルト	灰褐色粘土塊主体(住堆)

SI6 竪穴住居跡 P1・2 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐	シルト	地山ローム塊、焼土粒少量(P1堆)



第14図 SI7 竪穴住居跡

【SI13 竪穴住居跡】(第17・21図、写真29)

〔位置〕調査区南部

〔重複〕SI13 → SK20・P6・P7・SD1

〔規模・形状〕長軸2.7m以上、短軸2.4m以上の不整形に掘方埋土が残存する。

〔方向〕不明

〔壁面・床面・堆積土〕残存しない

〔柱穴〕重複する新しい遺構として扱った柱穴2か所(Pit6・7)は住居掘方埋土を掘り込んでおり、堆積土に焼土・炭化物粒を含む。床面及び住居内堆積土が残存せず明確にできないが、本住居に伴う可能性がある。

〔周溝〕不明

〔カマド〕住居北東部に焼土・白色粘土塊の分布範囲

を確認した。長軸105cm、短軸85cmの不整形で、カマド燃烧部底面・側壁の構築土の可能性が考えられる。また、北東側で確認した柱穴(Pit8)は堆積土に焼土粒を含み、位置関係からみて煙出しピットの可能性が考えられる。

〔貯蔵穴〕重複する新しい遺構として扱ったSK20土坑(後述)は、住居掘方埋土を掘り込んでおり、堆積土に焼土・炭化物粒を含む。堆積土上層からロクロ土師器坏6個体、小型甕1個体が出土している。床面及び住居内堆積土が残存しないため明確にできないが、カマドとの位置関係や形状、遺物の出土状況がSI7竪穴住居跡K1土坑と類似することから、本住居に伴う貯蔵穴と考えられる。



写真16 SI7 竪穴住居跡 (東から)



写真17 SI7 竪穴住居跡断面 (北東から)



写真18 SI7 竪穴住居跡断面 (北東から)



写真19 SI7 竪穴住居跡 K1 貯蔵穴遺物出土状況



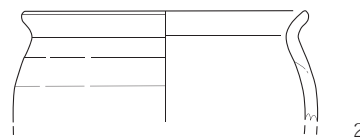
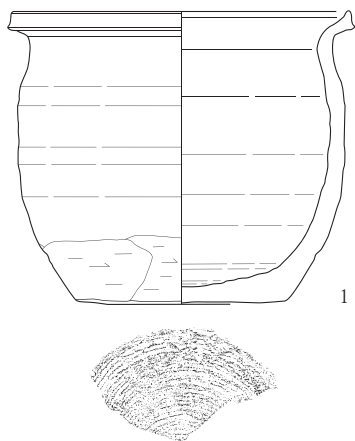
写真20 SI7 竪穴住居跡カマド (西から)



第15図 SI7 竪穴住居跡出土遺物(1)



写真 21 SI7 竪穴住居跡出土遺物



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI7	カマド構築土	ロクロ土師器	小型甕	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切→無調整 内面：ロクロナデ ※器形に歪みあり	(13.5)	(8.4)	11.7	1/3	UF14-3
2	SI7	堆積土	ロクロ土師器	小型甕	外面：(口) ヨコナデ、(胴) ナデ 内面：(胴) ナデ	(11.4)	-	(4.4)	一部	UF14-10
3	SI7	床面直上	土師器	小型甕	外面：ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ・列点状刺突文→赤彩 内面：ヘラミガキ	-	-	(2.5)	一部	UF14-22
4	SI7	カマド構築土	土師器	甕	外面：(胴) ナデ・ケズリ、(底) ナデ 内面：(胴) ナデ、(底) ナデ	-	-	(9.6)	一部	UF14-4

(第15図)

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI7	床面直上	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	(13.6)	(6.2)	4.9	1/2	UF14-2
2	SI7	K1 堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	6.0	4.6	3/5	UF14-11
3	SI7	K1 堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底) 回転糸切→(底付近) 手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	13.6	6.6	4.5	4/5	UF14-12
4	SI7	堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	(13.6)	6.2	4.9	3/5	UF14-6
5	SI7	堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、(底) 回転糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	14.3	7.4	3.6	4/5	UF14-7
6	SI7	K1 堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ→(底) 糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	(7.3)	5.0	1/2	UF14-13
7	SI7	堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(体) 横方向ヘラミガキ→(底) 放射状ヘラミガキ→黒色処理 ※内外面の風化著しい	(14.8)	(7.8)	5.1	1/4	UF14-9
8	SI7	K1 堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切→無調整 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	-	-	4.1	一部	UF14-14
9	SI7	堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ→黒色処理 ※外面(口~体)に横位墨書「是か」、「大か」、「大大大」	-	-	(3.2)	一部	UF14-8
10	SI7	カマド内堆積土	須恵器	坏	内外面：ロクロナデ ※胎土に海綿骨針を多く含む	-	-	(2.9)	一部	UF14-5

第16図 SI7 竪穴住居跡出土遺物(2)

〔遺物〕カマド燃焼部底面の構築土（1層）からロクロ土師器甕（第21図2）、礫片2点、住居掘方埋土からロクロ土師器環（第21図1）が出土した。

このほか、住居掘方埋土などからロクロ土師器環、須恵器小型品などが出土した。ロクロ土師器環には外面に墨書（判読不能）が見られる。

※SK20土坑についてはSI13 竪穴住居跡との関連が考えられることから、ここで詳述する。

〔SK20土坑〕（第17・22・23図、写真29～33）

〔位置〕調査区南部

〔重複〕SI13 → SK20 → SD1

〔規模・形状〕平面形が長軸87cm、短軸79cmの楕円形で、断面形は深さ27cmの皿状を呈する。底面に小穴3か所が認められる。

〔堆積土〕堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積土である。堆積土上層でロクロ土師器環6個体、

小型甕1個体が出土した。

〔遺物〕堆積土1層からロクロ土師器環（第22図、第23図1～3）・小型甕（第23図4）が出土した。ロクロ土師器環には外面に墨書「西」（第22図1～3）、「大か」（第23図3）が見られる。

このほか、堆積土中からロクロ土師器環・甕などが出土した。

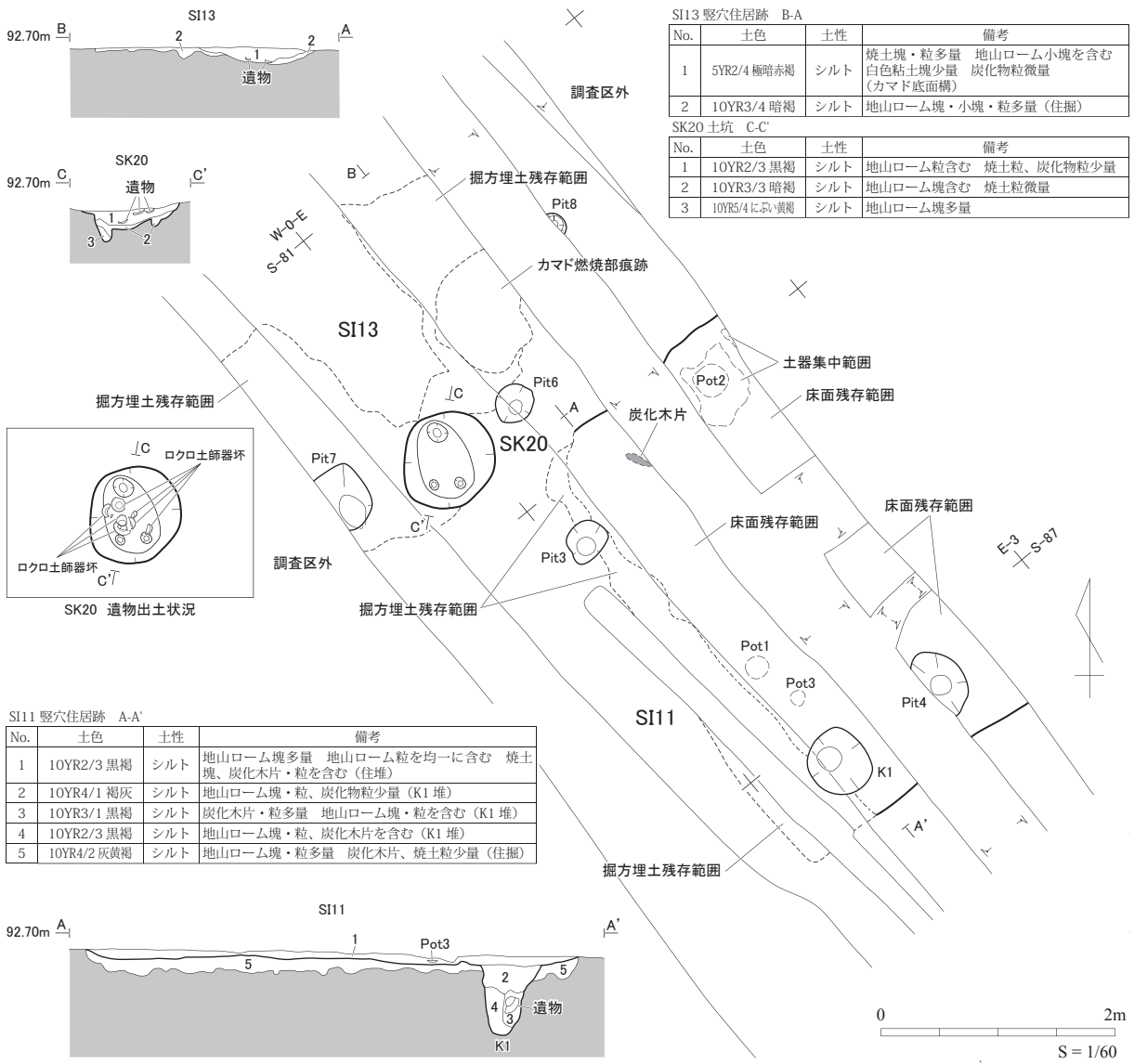
B. 落とし穴状土坑

〔SK3落とし穴状土坑〕（第24図、写真35・36）

〔位置〕調査区北部

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸340cm、短軸70cmの不整な溝状で、横断面形は深さ82cmで上部が広がるU字形を呈する。底面は平面形が長軸320cm、短軸23cmの溝状で両端より中央部が10cmほど低く、横断面形は皿状を呈する。



第17図 SI11・SI13 竪穴住居跡



写真 22 SI11 竪穴住居跡（北東から）



写真 23 SI11 竪穴住居跡断面（南西から）



写真 24 SI11 竪穴住居跡 K1 貯蔵穴断面



写真 25 SI11 竪穴住居跡 K1 貯蔵穴遺物出土状況



写真 26 SI11 竪穴住居跡床面 Pot.1 出土状況



写真 27 SI11 竪穴住居跡床面 Pot.2 出土状況

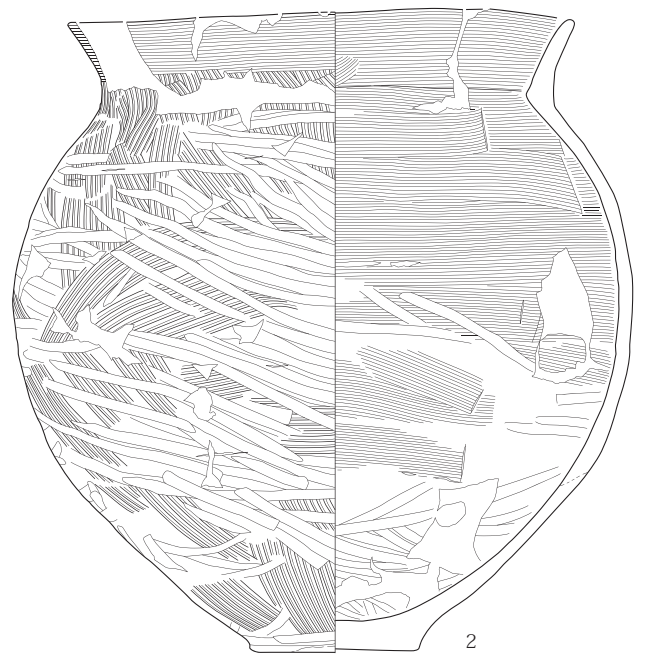
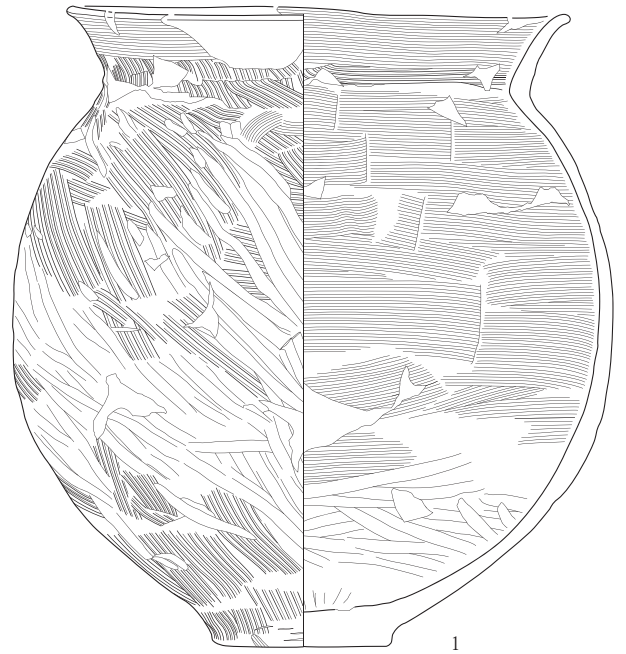


写真 28 SI11 竪穴住居跡出土遺物



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI11	床面直上 Pot.3	土師器	鉢	外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ ※胎土に海綿骨針を多く含む ※内外面（上部）に磨滅 内面（下部）にクレター状の小剥離著しい	(8.5)	-	5.2	2/3	UF14-15
2	SI11	K1 堆積土 (3層) Pot.4	土師器	鉢	外面：ハケメ→(屈曲部) ナデ・(口) ヨコナデ→縦方向ヘラミガキ→(屈曲部) 横方向ヘラミガキ・(底) ヘラミガキ→赤彩 内面：ナデ→(口) ヨコナデ→ヘラミガキ→(屈曲) 横方向ヘラミガキ→赤彩 ※外面（体）に粉痕 内面にクレター状の小剥離 内外面とも風化著しい	16.5	3.5	8.5	1/4	UF14-21
3	SI11	床面直上 Pot.2	土師器	器台	外面：ヘラミガキ→赤彩 内面：ハケメ→ナデ ※受け部と脚部の接合部に貫通孔 脚部に透かし孔3か所 脚部径：10.7cm	-	-	(5.7)	脚部	UF14-20
4	SI11	床面直上 Pot.1	土師器	壺	外面：(体) 縦方向ハケメ→縦方向ヘラミガキ→赤彩 内面：(体) ヘラナデ→縦方向ヘラミガキ、(口) 横方向ヘラミガキ→(口～頸) 赤彩	12.9	-	(12.6)	3/4	UF14-16

第 18 図 SI11 竪穴住居跡出土遺物 (1)



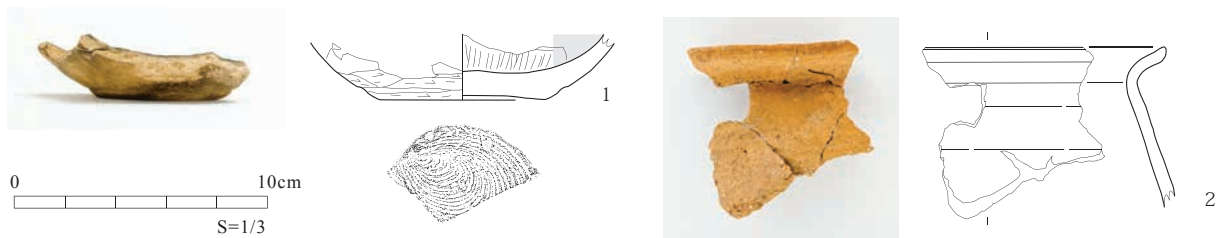
No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI11	床面直上 Pot.2	土師器	甗	外面：(胴) ハケメ→ヘラミガキ・(口) ヨコナデ、(底) ナデ→ヘラミガキ 内面：(胴) ヘラナデ→(胴下) ヘラミガキ、(頸) ハケメ→(口) ヨコナデ→ヘラミガキ ※内面(底) に炭化物付着	20.0	7.1	25.1	略完形	UF14-17
2	SI11	床面直上 Pot.2-a	土師器	甗	外面：(胴) ハケメ→ヘラミガキ・(口) ヨコナデ、(底) ヘラミガキ 内面：(胴) ヘラナデ→ヘラミガキ・(口) ヨコナデ ※器形(口~頸) に歪みあり	20.1	6.7	25.5	略完形	UF14-18

第19図 SI11 竪穴住居跡出土遺物 (2)



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI11	床面直上	土師器	甕	外面：(胴) 縦方向ハケメ→ヘラミガキ、(底) ヘラミガキ 内面：ヘラナデ→ヘラミガキ ※内外面にクレター状の小剥離著しい	-	5.8	(17.1)	3/5	UF14-19
2	SI11	床面直上 Pot.2-b	土師器	甕	外面：(胴) ハケメ→ヘラミガキ、(底) ヘラミガキ 内面：ヘラナデ→ヘラミガキ ※内面にクレター状の小剥離著しい	-	6.8	(20.6)	1/3	UF14-24

第20図 SI11 竪穴住居跡出土遺物 (3)



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI13	住居掘方埋土	ロクロ土師器	坏	外面：(体下) 手持ちヘラズリ、(底) 回転糸切→無調整 内面：ヘラミガキ→黒色処理	-	(6.6)	(2.6)	一部	UF14-36
2	SI13	カマド構築土	ロクロ土師器	甕	内外面：ロクロナデ	-	-	(6.8)	一部	UF14-35

第21図 SI13 竪穴住居跡出土遺物



写真 29 SI13 竪穴住居跡・SK20 土坑（北東から）



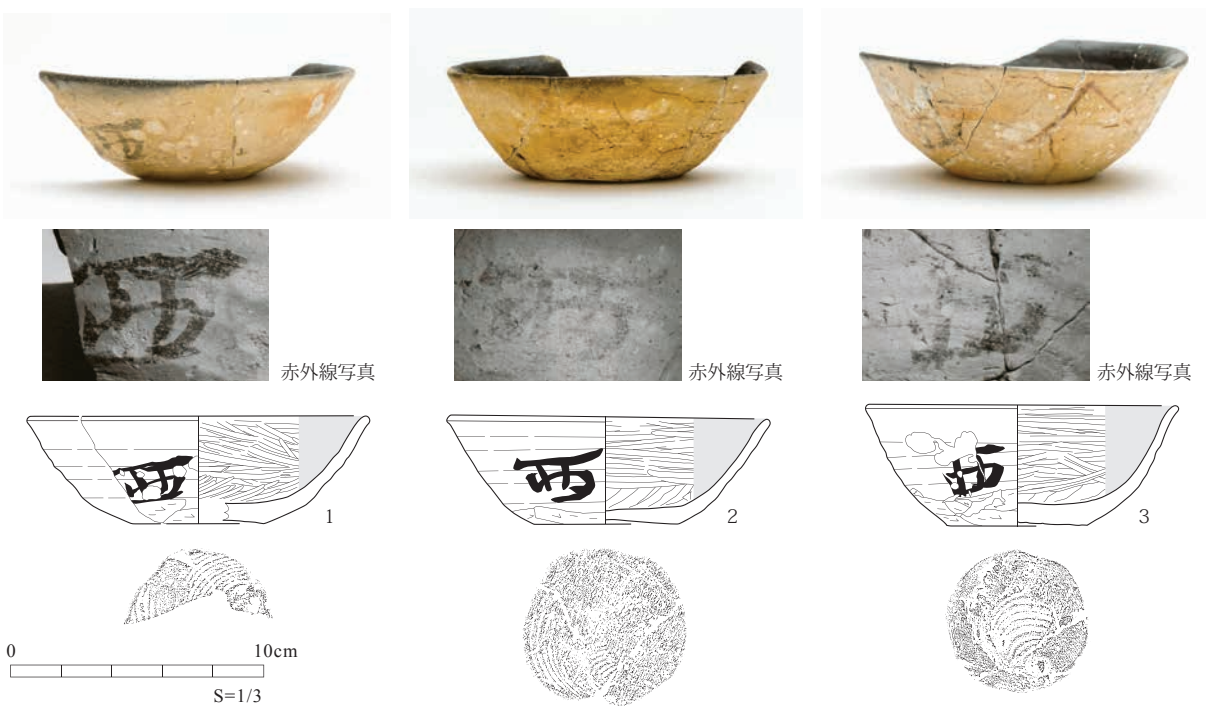
写真 30 SK20 土坑断面（西から）



写真 31 SK20 土坑遺物出土状況（東から）



写真 32 SK20 土坑遺物出土状況（北から）

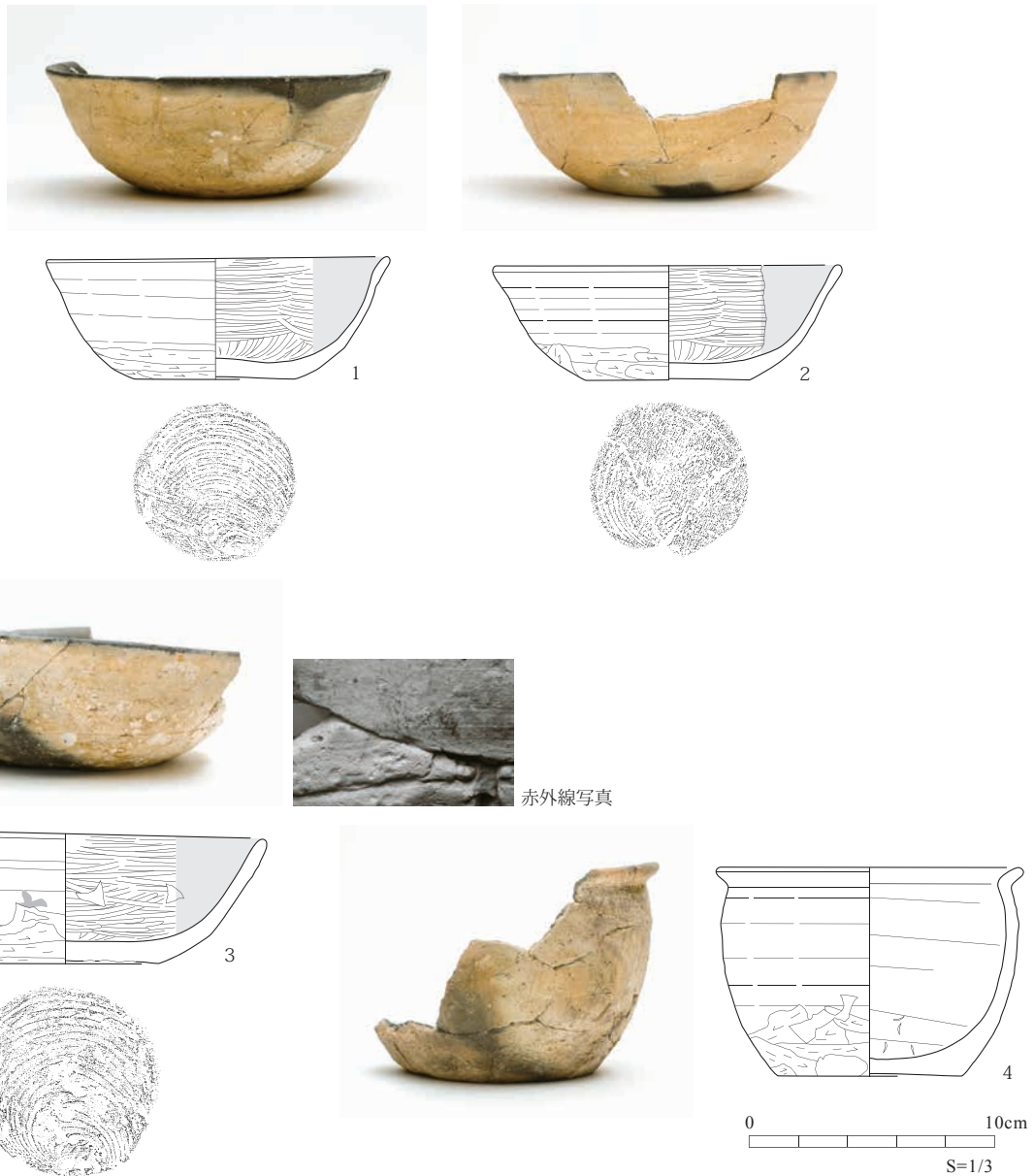


No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SK20	堆積土 1 層 Pot.2	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→（底付近）手持ちヘラケズリ、（底）回転糸切→無調整 内面：ヘラミガキ→黒色処理 ※外面（体）に正位墨書「西」	(13.6)	(5.2)	4.3	1/2	UF14-26
2	SK20	堆積土 1 層 Pot.6	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→（底付近）手持ちヘラケズリ、（底）回転糸切→手持ちヘラケズリ 内面：（底）放射状ヘラミガキ→（体）横方向ヘラミガキ→黒色処理 ※外面（体）に正位墨書「西」 器形に歪みあり	12.7	5.7	4.3	4/5	UF14-28
3	SK20	堆積土 1 層 Pot.11	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→（体下）手持ちヘラケズリ、（底）回転糸切→手持ちヘラケズリ 内面：（底）放射状ヘラミガキ→（体）横方向ヘラミガキ ※外面（体）に正位墨書「西」 外面にクレーター状の小剥離	12.4	5.6	4.8	4/5	UF14-30

第 22 図 SK20 土坑出土遺物 (1)



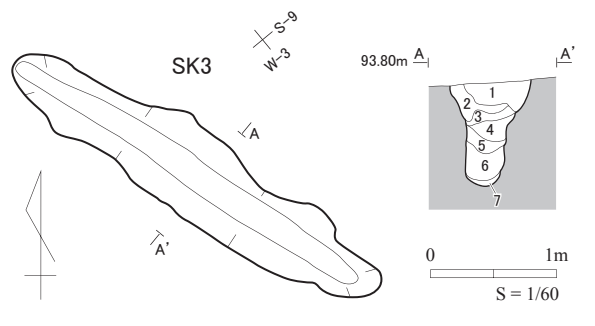
写真 33 SK20 土坑出土遺物



赤外線写真

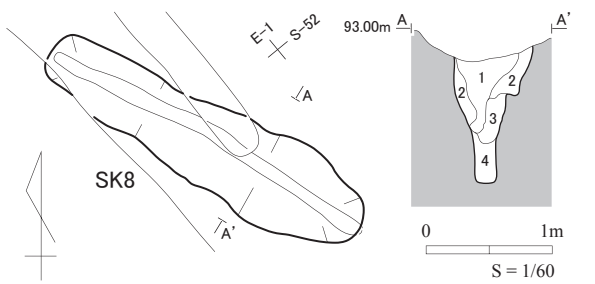
No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SK20	堆積土 1 層 Pot.1	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 回転糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 ※胎土に海綿骨針を多く含む ※外面 (体下~底) にクレター状の小剥離	14.1	6.5	5.0	3/4	UF14-25
2	SK20	堆積土 1 層 Pot.3	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 回転糸切→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 ※器形に歪みあり	(14.3)	6.7	4.7	1/2	UF14-27
3	SK20	堆積土 1 層 Pot.7+8+9	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 回転糸切→無調整 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ ※外面 (体) に不鮮明な正位墨書「大か」 外面にクレター状の小剥離	16.4	7.6	5.3	4/5	UF14-29
4	SK20	堆積土 1 層 Pot.10	ロクロ土師器	小型甕	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切→手持ちヘラケズリ 内面：回転ヘラナデ→(底) ナデ	(12.6)	7.6	8.6	2/1	UF14-31

第 23 図 SK20 土坑出土遺物 (2)



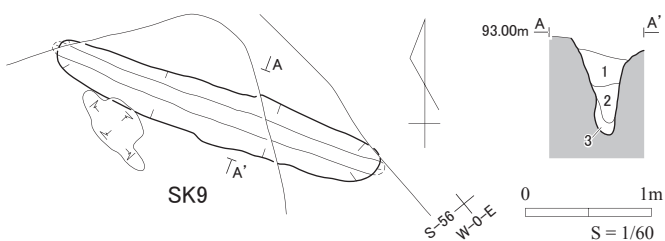
SK3 落とし穴状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム粒を含む 炭化物粒少量
2	10YR4/4 褐	シルト	地山ローム塊・粒を含む
3	10YR4/6 褐	シルト	地山ローム粒多量
4	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム塊・粒を含む
5	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム大塊・粒多量
6	10YR4/4 褐	シルト	地山ローム粒多量 地山ローム塊少量
7	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム塊多量



SK8 落とし穴状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム塊・粒多量 焼土粒少量 炭化物粒微量
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム塊・粒多量
3	10YR5/6 黄褐	シルト	地山ローム塊を含む
4	10YR4/4 褐	シルト	地山ローム塊・粒多量



SK9 落とし穴状土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム塊・粒多量 黒色土小塊少量
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム小塊・粒極めて多量
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム塊極めて多量



写真34 SK8・9 落とし穴状土坑 (東から)

第24図 SK3・8・9 落とし穴状土坑



写真35 SK3 落とし穴状土坑 (北西から)



写真37 SK8 落とし穴状土坑 (西から)



写真39 SK9 落とし穴状土坑 (東から)



写真36 SK3 落とし穴状土坑断面



写真38 SK8 落とし穴状土坑断面



写真40 SK9 落とし穴状土坑断面

〔方向〕長軸：N - 58° - W

〔堆積土〕7層に細分され、下部が崩落土、上部が自然堆積土である。

〔遺物〕なし

【SK8 落とし穴状土坑】(第24図、写真34・37・38)

〔位置〕調査区中央部

〔重複〕SK8 → SD5 → SD1

〔規模・形状〕平面形は長軸286cm、短軸75cmの不整な溝状で、横断面形は深さ110cmのV字形を呈する。壁面は両端で下部が広がる。底面は平面形が長軸280cm、短軸10cmの溝状で両端より中央部が20cmほど低く、横断面形は平坦である。

〔方向〕長軸：N - 62° - W

〔堆積土〕4層に細分され、下部が崩落土、上部が自然堆積土である。

〔遺物〕なし

【SK9 落とし穴状土坑】(第24図、写真34・39・40)

〔位置〕調査区中央部

〔重複〕SK9 → SI7

〔規模・形状〕平面形は長軸280cm、短軸48cmの溝状で、横断面形は深さ72cmのV字形を呈する。壁面は両端で下部が広がる。底面は平面形が長軸281cm、短軸15cmの溝状で両端より中央部が10cmほど低く、横断面形は皿状を呈する。

〔方向〕長軸：N - 70° - W

〔堆積土〕3層に細分され、下部が崩落土、上部が自然堆積土である。

〔遺物〕なし

C. 土坑

【SK12 土坑】(第11図)

〔位置〕調査区南部

〔重複〕SD1 → SK12

〔規模・形状〕平面形は長軸110cm、短軸40cm以上の隅丸方形で、横断面形は深さ10cmの逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕1層で、人為的埋土である。

〔遺物〕堆積土から土師器小型品などが出土した。

【SK14 土坑】(第25図、写真41)

〔位置〕調査区南部

〔重複〕SK15 → SK14

〔規模・形状〕平面形は長軸85cm、短軸60cmの楕円形で、横断面形は深さ8cmの皿形を呈する。底面は薄い掘方埋土(5層)で構築され、皿状を呈する。底面全体に炭化した草本植物が見られた。

〔堆積土〕4層に細分され、いずれも人為的埋土である。

〔遺物〕堆積土から土師器、陶器甕などが出土した。

【SK15 土坑】(第25図)

〔位置〕調査区南部

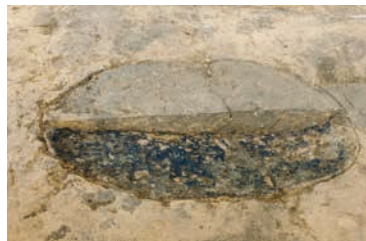
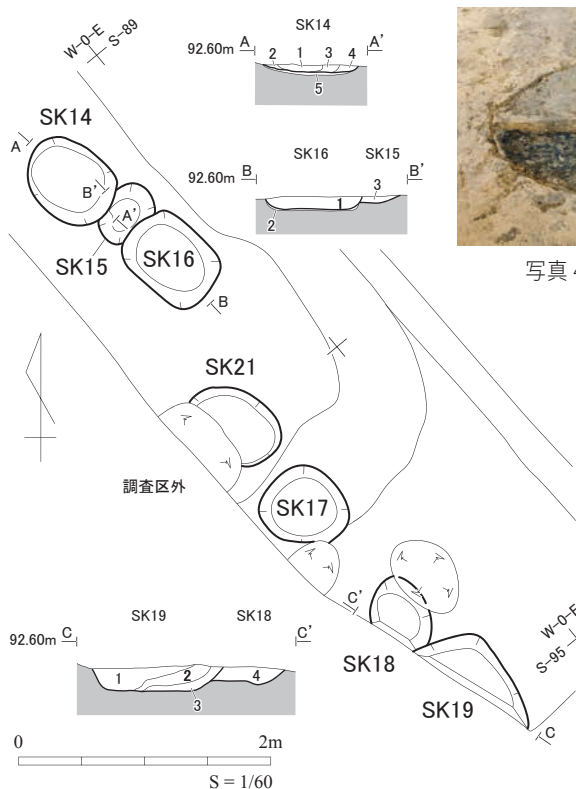


写真41 SK14 土坑断面

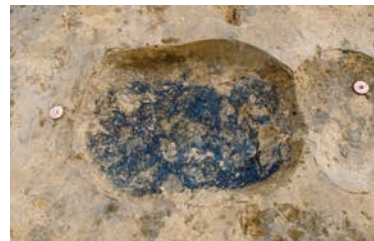


写真42 SK16 土坑炭化物層検出状況(北東から)

SK14 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム小塊・粒多量 炭化物粒少量(人為)
2	10YR4/6 褐	シルト	地山ローム塊を含む(人為)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム粒少量 炭化物粒微量(人為)
4	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム粒多量(人為)
5	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム塊を含む(掘) 上面に薬灰状の炭化物薄層

SK15・16 土坑 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム小塊多量 炭化物粒微量(SK16堆、人為)
2	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ローム塊を含む(SK16掘) 上面に薬灰状の炭化物薄層
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム粒多量 地山ローム小塊少量(SK15堆、人為)

SK18・19 土坑 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐	シルト	地山ローム粒多量 地山ローム小塊、炭化物粒少量(SK19堆、人為)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム粒多量 地山ローム小塊少量 炭化物粒微量(SK19堆、人為)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	地山ローム小塊多量 地山ローム粒少量 炭化物粒微量(SK19堆、人為)
3	10YR2/3 黒褐	シルト	地山ローム粒多量 地山ローム小塊・炭化物粒少量(SK18堆)

第25図 SK14～19・21 土坑

〔重複〕 SK15 → SK14・SK16

〔規模・形状〕 平面形は長軸 50cm、短軸 35cm 以上の略円形で、横断面形は深さ 7cm の皿形を呈する。

〔堆積土〕 1 層で、人為的埋土である。

〔遺物〕 なし

【SK16 土坑】 (第 25 図、写真 42)

〔位置〕 調査区南部

〔重複〕 SK15 → SK16

〔規模・形状〕 平面形は長軸 80cm、短軸 60cm の楕円形で、横断面形は深さ 10cm の扁平な U 字形を呈する。底面は薄い掘方埋土 (2 層) で構築され、ほぼ平坦である。底面全体に炭化した草本植物が見られた。

〔堆積土〕 1 層で、人為的埋土である。

〔遺物〕 堆積土から磁器が出土した。

【SK17 土坑】 (第 25 図)

〔位置〕 調査区南部

〔重複〕 SD1 → SK17

〔規模・形状〕 平面形は長軸 25cm、短軸 22cm の略円形で、横断面形は深さ 7cm の皿形を呈する。

〔堆積土〕 1 層で、自然堆積土である。

〔遺物〕 なし

【SK18 土坑】 (第 25 図)

〔位置〕 調査区南部

〔重複〕 SK18 → SK19

〔規模・形状〕 平面形は長軸 24cm 以上、短軸 18cm 以上の楕円形で、横断面形は深さ 14cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 1 層で、人為的埋土である。

〔遺物〕 なし

【SK19 土坑】 (第 25 図)

〔位置〕 調査区南部

〔重複〕 SK18 → SK19

〔規模・形状〕 平面形は長軸 40cm 以上、短軸 22cm 以上の楕円形とみられ、断面形は深さ 20cm の逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3 層に細分され、いずれも人為的埋土である。

〔遺物〕 なし

【SK21 土坑】 (第 25 図)

〔位置〕 調査区南部

〔重複〕 なし

〔規模・形状〕 平面形は長軸 31cm、短軸 19cm の楕円形で、断面形は深さ 11cm の皿形を呈する。底面全体に炭化した草本植物が見られた。

〔堆積土〕 1 層で、人為的埋土である。

〔遺物〕 なし

D. 溝跡

【SD1 溝跡】 (第 11・26 図、写真 44～47)

〔位置〕 調査区全体

〔重複〕 SI11・SI13・SK8・SK20・SD5・SD10 → SD1 → SK17

〔規模・形状〕 延長 92.5m を確認した。北西 - 南東方向に直線的に約 91m 以上、調査区南東端で直角に折れて南西方向へ約 1.5m 以上延び、両端が調査区外へ続いている。上幅 40～220cm、底幅 20～60cm、深さ 20～30cm で、横断面形は逆台形～皿形を呈する。底面は皿状を呈し、地形に沿って南東方向へ緩やかに傾斜する。

〔堆積土〕 3 層に細分され、いずれも自然堆積土である。

〔遺物〕 堆積土からロクロ土師器坏 (第 26 図 2)、土師器甕 (第 26 図 1)・小型品 (第 26 図 3)、須恵器甕 (第 26 図 4) が出土した。ロクロ土師器坏は外面に墨書「西」が見られる。

このほか、堆積土からロクロ土師器坏、土師器壺・甕、須恵器甕、中世陶器甕、瓦、陶器播鉢・碗、磁器角小皿・丸皿・碗、硝子小瓶などが出土した。土師器甕は外底面にヘラ描き「×」が見られるものがある。

【SD2 溝跡】 (第 11 図、写真 43)

〔位置〕 調査区北部

〔重複〕 SD2 → SD4

〔規模・形状〕 延長 35.8m を確認した。北西 - 南東方向に直線的に延び、両端が調査区外へ続いている。上幅 70～140cm、底幅 30～50cm、深さ 20～30cm で、横断面形は皿形を呈する。底面は皿状を呈し、地形に沿って南東方向へ緩やかに傾斜する。

〔堆積土〕 1 層で、自然堆積土である。

〔遺物〕 なし

【SD4 溝跡】 (第 11 図)

〔位置〕 調査区北部

〔重複〕 SD2 → SD4

〔規模・形状〕 延長 22.4m を確認した。北西 - 南東方向に直線的に延び、両端が調査区外へ続いている。上幅 70～110cm で、横断面形は逆台形を呈する。記録不備により底幅および深さ、底面の傾斜方向は不明である。

〔堆積土〕 1 層で、自然堆積土である。

〔遺物〕 なし

【SD5 溝跡】 (第 11 図、写真 45・46)

〔位置〕 調査区中央部

〔重複〕 SK8 → SD5 → SD1

〔規模・形状〕 延長 16.4m で北西 - 南東方向に直線的に延びる。上幅 30～32cm、底幅 10～20cm、深



写真 43 SD2 溝跡 (南東から)



写真 44 SD1 溝跡 (南東から)



写真 45 SD1・5 断面 (第 11 図 A-A')



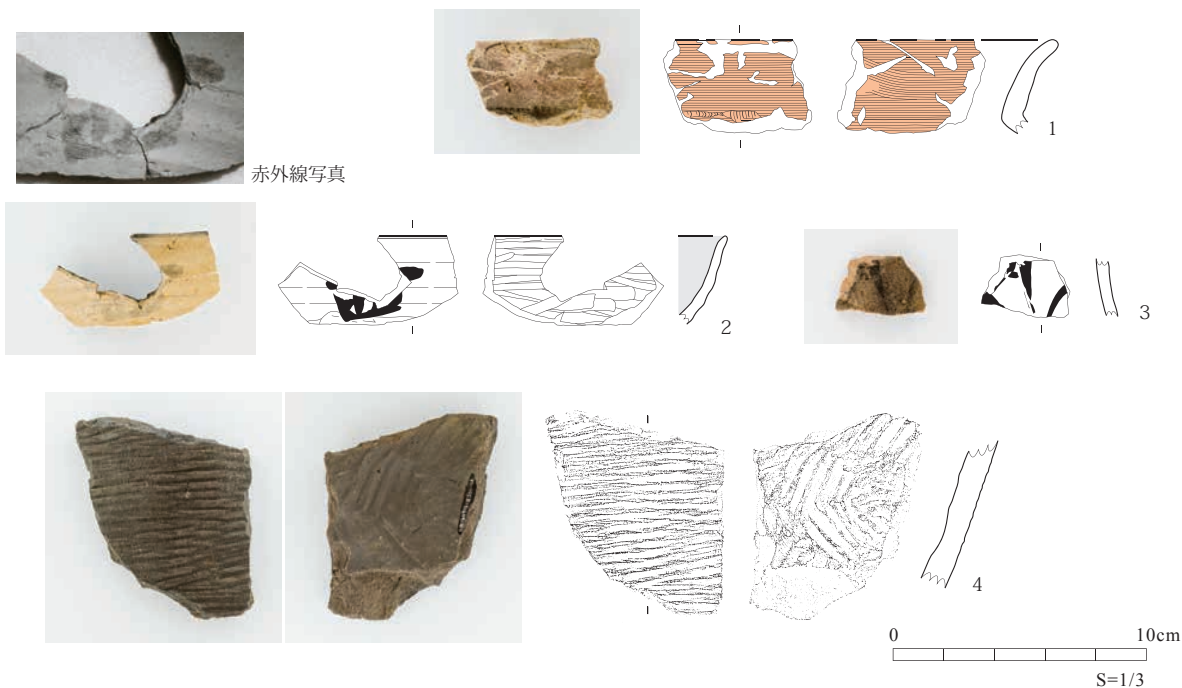
写真 46 SD1・5 断面 (第 11 図 B-B')



写真 47 SD1 断面 (第 11 図 C-C')



写真 48 SD10 溝跡 (第 11 図 D-D')



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SD1	堆積土2層	土師器	甕	外面：ハケメ→ヨコナデ→赤彩 内面：ハケメ→ヨコナデ→赤彩	-	-	(3.7)	一部	UF14-32
2	SD1	堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ ※外面(体)に正位墨書「西」	-	-	(3.5)	一部	UF14-34
3	SD1	堆積土2層	土師器	小型品	外面：ナデ 内面：ナデ ※外面に墨書「□」	-	-	-	一部	UF14-23
4	SD1	堆積土2層	須恵器	甕	外面：平行タタキ 内面：アテ具痕	-	-	(5.9)	一部	UF14-33

第26図 SD1 溝跡出土遺物

さ 22～45cm で、横断面形はU字形を呈する。底面は皿状を呈し、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕2層に細分され、下部が人為的埋土、上部が自然堆積土である。

〔遺物〕堆積土からロクロ土師器坏、土師器小型品、磁器染付碗・くわんか皿などが出土した。

【SD10 溝跡】(第11図、写真48)

〔位置〕調査区南部

〔重複〕SD10 → SD1

〔規模・形状〕延長10.4mを確認した。北西 - 南東方向に直線的に伸び、南東側が調査区外へ続いている。上幅18～30cm、底幅10～18cm、深さ17～22cmで、横断面形はU字形を呈する。底面は皿状を呈し、地形に沿って南東方向へ緩やかに傾斜する。

〔堆積土〕2層に細分され、下部が人為的埋土、上部が自然堆積土である。

〔遺物〕堆積土から磁器染付碗が出土した。

E. その他の出土遺物

【柱穴】Pit 4の堆積土から土師器小型品、弥生土器、Pit5の堆積土からロクロ土師器坏、Pit7の堆積土からロクロ土師器坏・甕が出土した。土師器小型品は内外面に赤彩を施すものがある。

【遺構外】表土・遺構・攪乱土から土師器甕・小型品、

ロクロ土師器坏、須恵器甕、磁器染付碗などが出土した。土師器小型品は内外面にヘラミガキ調整の後、外面に赤彩を施すものがある。

③ 遺物の特徴と編年的位置づけ

今回の調査で出土した遺物のうち、ややまとまった出土状況が見られたSI6・7・11・13 竪穴住居跡およびSI13 竪穴住居に伴う貯蔵穴と考えられるSK20 土坑の出土土器について検討を加える。

【第1群土器】(SI11 竪穴住居跡出土土器)

土師器鉢、器台、壺、甕がある(第18～20図)。鉢は平底で体部と口縁部の境界に強い屈曲を持つ。体部が内弯し、口縁部が内弯気味に外傾する。内外面が丁寧なヘラミガキ調整で仕上げられる。口径8.5cmの小型のものと、口径16.5cmの中型のものがあり、後者は内外面に赤彩を施す。小型のものは胎土に海綿骨針を多く含む。器台は外反しながら開く脚部を持つ。受け部と脚部の接合部に貫通孔があり、脚部に透かし孔3か所がある。外面に丁寧なヘラミガキ調整の後、赤彩を施す。壺は体部が球形を呈し、頸部がくの字形に屈曲して口縁部が外反する。外面の全体が縦方向、内面の口縁部が横方向の丁寧なヘラミガキ調整で仕上げられ、赤彩を施す。体部の内面には粗いヘラミガキ調整を施す。甕は球胴形で、頸部がくの字形に

屈曲して口縁部が外反する。外面の胴部から頸部にかけて不規則なハケメ調整の後、斜め方向の粗いヘラミガキ調整を施す。内面の胴部はヘラナデ調整の後、下半部に粗いヘラミガキ調整を施す。口縁部は内外面ヨコナデ調整である。なお、すべての器種で胎土に海綿骨針が認められ、このうち小型器種の鉢、器台、壺にやや多く含む傾向が見られる。

このような器種構成や形態の特徴を持つ土器群は、古墳時代前期の塩釜式（氏家 1957）の範疇に含まれるものと考えられる。宮城県内における当該期の土器編年については、辻秀人により細分が図られている（辻 1994・1995）。塩釜式は辻編年Ⅱ～Ⅲ期に該当し、Ⅱ期では多様な小型鉢が存在し小型器台との緩やかなセット関係を持つものに対して、Ⅲ期では小型器台の上に乗せることを前提に体部を小型で球形に近い形とする小型丸底鉢と小型器台とのセット関係が成立するとされている。本群土器に組成する小型の鉢は辻編年の器種分類における坏G（小型丸底鉢）、器台は器台D（小型器台）に該当し、上述のセット関係が見られる。

以上のことから、本群土器は古墳時代前期の塩釜式期（4世紀）に比定され、資料的な制約はあるものの辻編年Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

なお、本遺跡南側に隣接する六角遺跡では当該期の集落跡を確認している。本群土器はこれに伴う六角遺跡第1群土器（第6集）に並行し、器種構成の面で補完関係にあるものと考えられる。

【第2群土器】（SI6・7・13 竪穴住居跡、SK20 土坑出土土器）

ロクロ土師器坏・小型甕・甕、須恵器坏がある（第13・15・16・21～23図）。坏は全て内面をヘラミガキ調整の後、黒色処理仕上げとする。体部から口縁部まで内弯気味に外傾するものが主体で、直線的に外傾するものも見られる。口径に占める底径の比率（底径口径比）は0.45～0.52である。底部の切り離し方法が明らかなものはいずれも回転糸切である。切り離し後に手持ちヘラケズリによる再調整を施すものが主体で、再調整を行わないものは少数である。小型甕、甕は口縁部が短く外反するもので、口縁端部をわずかに摘み上げるものがある。底部の切り離し方法が明らかなものは回転糸切である。なお、ロクロ土師器坏、小型甕、甕は胎土に少量の海綿骨針を含むものが散見される。須恵器坏は胎土に海綿骨針を多く含む。

このような器種構成や形態の特徴をもつ土器群は、平安時代の表杉ノ入式（氏家 1957）の範疇に含まれる。宮城県内における当該期の土器編年については、多賀城跡出土土器の分析から白鳥良一（1980）によ

り4段階に細分が図られ、時期が降るほど底径口径比が小さくなる傾向や、ロクロ台からの切り離し後の再調整が省略される傾向が明らかにされている。その後、資料の増加を踏まえて再検討が行なわれ（宮城県多賀城跡調査研究所 1992～1994）、9～10世紀代の土器群を9段階に細分している（柳沢 1994）。また、村田晃一（1994）は多賀城跡に周辺の集落跡を加えた宮城郡の9～11世紀代の土器群を7段階に細分し、県北・県南部との並行関係を示している。

本群土器に組成するロクロ土師器坏は回転糸切による底部の切り離し後に手持ちヘラケズリによる再調整を施すものが主体的であり、村田編年では2群土器（9世紀第1四半期後半～第2四半期）から3群土器（9世紀第3四半期）に該当する。蔵王町前戸内遺跡第2群土器（町16集）、戸ノ内遺跡'09-SI1住居跡（町18集）、西屋敷遺跡SE45井戸跡（町15集）、東山遺跡土器溜（宮城県教育委員会 1981）、大河原町台ノ山遺跡8号住居跡（宮城県教育委員会 1980a）、白石市青木遺跡第21号住居跡（宮城県教育委員会 1980b）などに類例が見られ、このうち本遺跡に近接する前戸内遺跡、戸ノ内遺跡、西屋敷遺跡では器形や調整痕の特徴が本群土器と酷似する資料が見られる。

以上のことから、本群土器は平安時代前葉の表杉ノ入式期のもので、共存する須恵器の様相が不明であるなど資料的な制約はあるものの、概ね9世紀前葉～中葉に位置づけられるものと考えられる。

④遺構の時期と特徴

確認した遺構は竪穴住居跡4軒、溝跡5条、落とし穴状土坑3基、土坑9基、柱穴7か所である。これらの遺構について、出土土器の編年の位置づけと、各遺構の配置状況および新旧関係などから機能時期を推定し、各時期の遺跡の性格について考察する。

【I期：縄文～弥生時代】（SK3・8・9 落とし穴状土坑）

落とし穴状土坑3基がある。いずれも長軸方向が北西～南東方向であり、形態も類似することからほぼ同時期に機能したものと考えられ、方向をそろえていることから列状配置されていた可能性がある。遺物が出土していないため正確な時期比定は難しいが、概ね円田盆地北部に集落形成が窺われる弥生時代中期以前のものとして推定される。

本遺跡では今回調査区北東側の丘陵辺縁部でも落とし穴状土坑群を確認しているが、これらは平面形が小判形を呈する（町4集、2005年度調査）。今回調査区は丘陵平坦面上にあり、確認したものは溝状の平面形をとるものである。これと同様のものは本遺跡南側に

隣接する六角遺跡の丘陵平坦面から尾根筋周辺で確認しており（町6集、2006年度調査）、地形的にも連続性があることから一体的に機能したものと考えられる。

円田盆地北部で確認している落とし穴状土坑については、縄文時代中期～後期に盛行したとされる列状配置をとるものが多いことから、盆地西側の高木丘陵上に展開する縄文時代中期を中心とする時期の集落群との関連で考えており（鈴木2006）、本例についても同様の位置づけが考えられる。

【Ⅱ期：古墳時代前期】（SI11 竪穴住居跡）

竪穴住居跡1軒があり、第1群土器を伴う。竪穴住居跡は南東隅に貯蔵穴を持ち、床面に炭化材の散布が見られたことから焼失住居の可能性はある。

本遺跡では今回調査区の西側隣接地でも当該期の竪穴住居跡1軒（町17集）を確認している。また、南側に隣接する六角遺跡では竪穴住居跡7軒を確認している（町6・17集）。これらは同一の分布を形成しているものと見られ、住居の方位も真北から45度前後振れることで共通している。このことから、本遺跡南部から六角遺跡北部にかけての舌状丘陵上の平坦面に当該期の集落が展開していたと考えられる。

【Ⅲ期：平安時代前葉】（SI6・7・13、SK20）

竪穴住居跡3軒、土坑1基があり、第2群土器を伴う。土坑は残存状況の良好でない竪穴住居跡に伴った貯蔵穴と考えられる。竪穴住居跡は方位や構造から以下に述べるように二つのまとまりに分けられる。

A群（SI7・13）：真北からやや西に振れる一辺5m弱の中型の住居である。周溝・主柱穴を持たない。カマドは住居東壁に付設され、カマド右側に貯蔵穴を持つ。貯蔵穴内からロクロ土師器坏・小型甕がややまとまって出土している。墨書土器が見られる。

B群（SI6）：真北方向に方位を合わせた一辺3m弱の小型の住居である。周溝を持ち、住居中央付近に柱穴1か所がある。カマドは住居南壁に付設され、カマド右側に小型の貯蔵穴を持つ。

当該期の遺構は、本遺跡と近接する前戸内遺跡、戸ノ内遺跡、西屋敷遺跡でも確認しており、盆地に張り出す複数の低平な舌状丘陵の基部に集落群が展開していたことが窺える。既述のとおりこれらの4遺跡では出土土器の細部に見られる特徴が酷似することや、墨書土器が多く見られることから相互に関連を持ちながら機能したと推定される。前戸内遺跡は官衙風建物群を伴うことから郷長・百姓クラスの豪族居宅とこれに従属する集落と考えており、戸ノ内遺跡は小集落と推定している。本遺跡における当該期の集落も数軒の

住居からなる小集落であったと考えられる。

なお、今回の調査で「西」と墨書された土器4点が出土した。上述の各集落では見られなかった文字であり、本集落あるいはその構成員の性格などに関係している可能性が考えられる。また、これと合わせて習書と考えられる墨書土器の存在も注目される。

【Ⅳ期：近世以降】（SD1・2・4・5・10、SK12・14・15・16・17・18・19・21）

調査前の現道と同じ方向に伸びる溝跡群と、調査区南東部に密集する小型の土坑群がある。遺物はまとまった出土状況は見られないが、土器類の小片と中世陶器、近世後期～近代の陶磁器、硝子小瓶がある。

SD5・10溝跡は近世後期に機能した区画施設の一部、SD1・2・4は近世後期～近代に機能した道路側溝と考えられる。このことから、現在の調査区周辺の地割が近世後期以前には成立していたことが窺える。

土坑群はSD1溝跡との重複関係から近代以降に機能したものと推定される。平面形が長軸80cm、短軸60cm前後の楕円形を呈する浅い土坑で、底面に藁灰が薄く堆積している。こうした特徴を持つ土坑は、当地方の一般家庭で昭和中期頃まで行なわれた「土納豆」作り（鹿島1993）に使用されたものであろう。

⑥まとめ

- ・縄文～弥生時代の落とし穴状土坑3基を確認した。過去の調査成果と合わせて舌状丘陵辺縁部に楕円形タイプ、丘陵平坦面から尾根部に溝状タイプの落とし穴が列状配置されていたことが判明した。
- ・古墳時代前期の竪穴住居跡1軒を確認した。過去の調査成果と合わせて本遺跡南部から六角遺跡北部にかけての丘陵平坦面に集落が展開していることが判明した。主柱穴を持たない住居構造や、真北から45度前後振れる住居方位に斉一性が見られる。
- ・平安時代前葉の竪穴住居跡3軒を確認し、丘陵平坦面に小規模な集落が形成されていたことが判明した。貯蔵穴からロクロ土師器坏・小型甕がややまとまって出土し、「西」などの墨書土器が複数見られる。
- ・近世以降の溝跡5条、土坑8基を確認した。溝跡は近世後期以降の区画溝や道路側溝とみられ、現在の調査区周辺の地割が近世後期以前には成立していたことが判明した。土坑群は近代以降のもので見られ、納豆の自家製造に使われた可能性がある。
- ・同一の舌状丘陵上に立地し、地形的に連続する本遺跡と六角遺跡には、一体的な遺構分布が展開していることが判明した。

第2節 遺構確認調査

1. 北割山遺跡

調査要項（第1表1）

遺跡名：北割山遺跡（遺跡登録番号 07015）

調査原因：太陽光発電所建設計画

調査箇所：蔵王町大字小村崎字山崎 40-3

調査期間：平成26年4月8・9日

対象面積：10,222m²

調査面積：259.5m²

調査主体：蔵王町教育委員会

調査員：鈴木雅・庄子善昭

遺跡の概要

円田盆地と村田盆地を画する愛宕山丘陵の尾根上から東西斜面部に立地し、縄文・弥生時代の散布地として登録されている。南北方向に延びる尾根部の標高は約115～141mで、県道岩沼蔵王線が通る遺跡南側の鞍部は割山峠と通称されている。本遺跡ではこれまでに発掘調査は行なわれていない。

調査の成果

建設計画範囲にトレンチ27か所を設定して調査を実施した。旧地形は西から入る浅い谷地形で、全体に過去の造成による削平が見られた。現況地形の最高所は1トレンチ付近であり、これより北西側の南西向斜面部では過去の造成による盛土が厚くトレンチ掘削が困難なため今回は調査対象としなかった。

基本層序は、1層：表土、2層：黒色粘質シルト、3層：砂混じり黒色粘質シルト、4層：礫混じり黄褐色ローム、5層：黄褐色ローム漸移層、6層：黄褐色ローム、

7層：蔵王-川崎スコリアとなる。各トレンチの表土直下には2層以下の各層の削平面が露出したので、この削平面を遺構確認面とした。2・3層は湿地性堆積土で、21～26トレンチで確認した。旧地形の谷筋にあたりと考えられる。

遺構は、8・10・12トレンチで幅約3～6mの帯状で東西方向に18m以上延びる暗褐色土のプランを確認した。8トレンチで一部掘り下げを行なったとこ



写真 49 遺跡遠景（西から、矢印は調査地点）



写真 50 調査前現況（北西から）



写真 51 トレンチ掘削状況（北から）



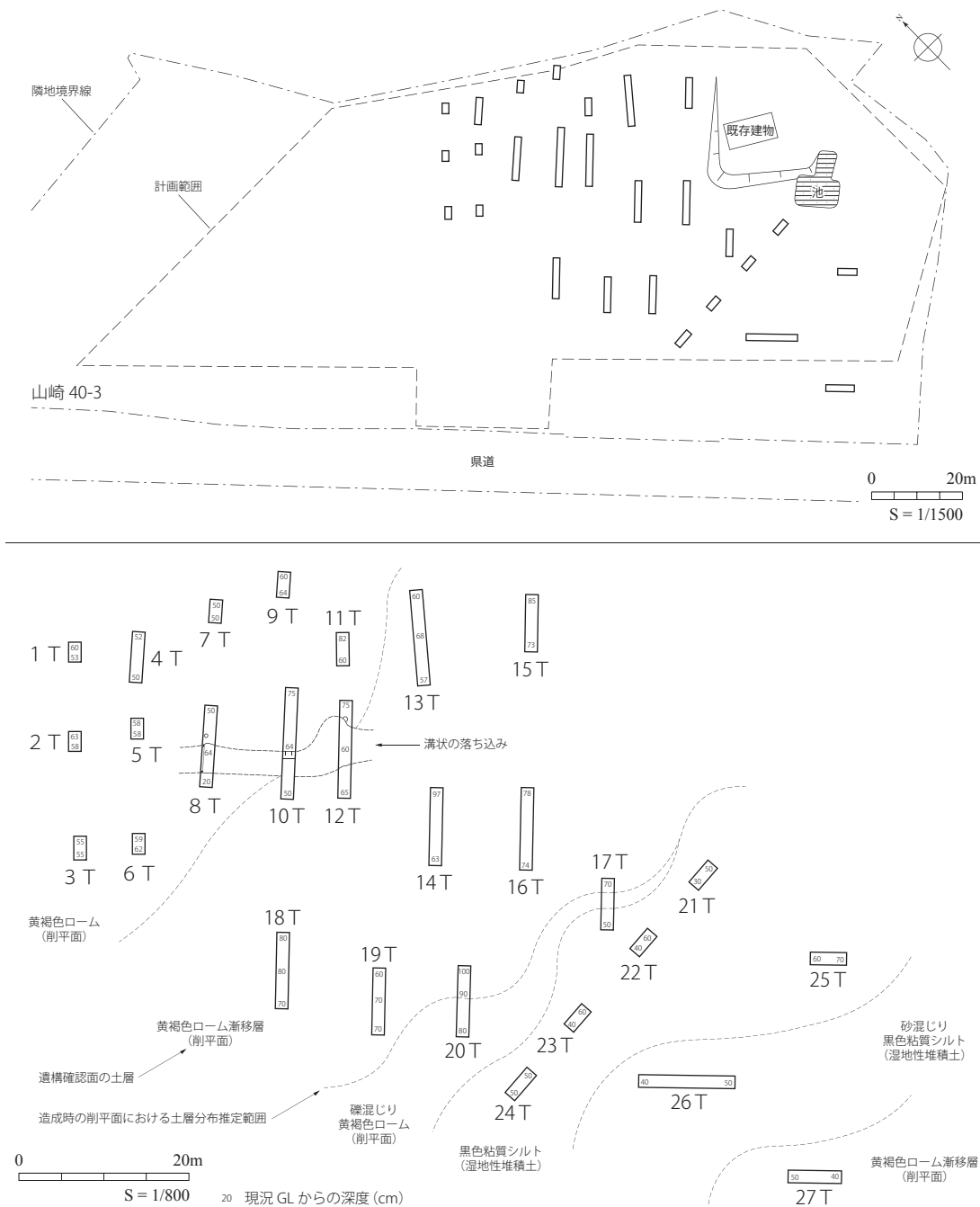
第27図 調査地点位置図

ろ、深さ 30cm 程度で底面は凹凸が著しく、堆積土にしまりがないことから新しい掘り込みと判断した。また、8・12 トレンチで直径約 40～50cm の円形プランを確認し、一部掘り下げを行なったが、いずれも溝状プランと同様に新しい掘り込みと判断した。

遺物は 8・12 トレンチの遺構確認面でロクロ土師器小型甕か（第 29 図 2）・小型甕か（第 29 図 3）、弥生土器（第 29 図 4）、不明土製品（第 30 図 1）が出土した。また、18 トレンチ南側でロクロ土師器坏（第 29 図 1）が表面採集された。不明土製品は無底で体

部が直線的に内傾し、円形孔 1 か所を持つ。内外面ナゲ調整の後、外面に粗いヘラケズリ調整を施す。移動式のカマドなどの可能性が考えられるが、残存部が少なく不明である。

以上のことから、建設計画範囲の大部分は旧地表面が後世の削平を受けており、保存の対象とすべき遺構は残存しないことが判明した。なお、今回調査対象としなかった北西部の盛土下には旧地表面が残存する可能性があるが、今回の工事による掘削等は及ばないことから現状保存とした。



第 28 図 北割山遺跡調査区配置図



写真 52 トレンチ掘削状況（南から）



写真 53 トレンチ掘削状況（東から）



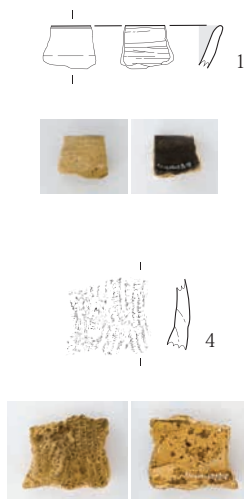
写真 54 1 トレンチ（北東から）



写真 55 8 トレンチ（北東から）



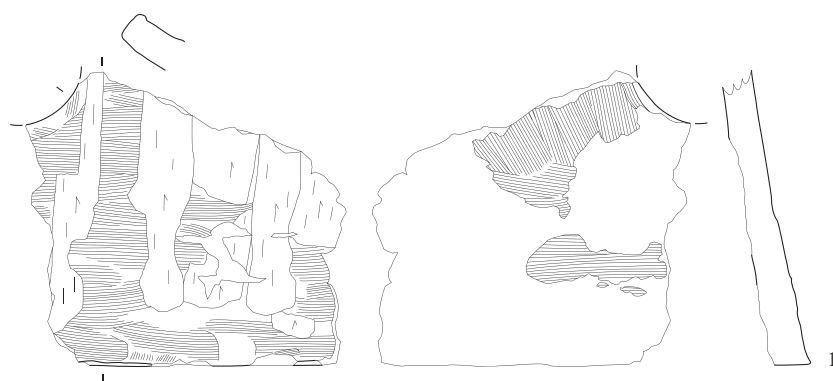
写真 56 12 トレンチ（北東から）



0 10cm
S=1/3

No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	-	表採	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	-	-	(1.7)	一部	AF-01
2	8T	確認面	ロクロ土師器	小型裏か	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 内面：ロクロナデ	-	-	(5.3)	一部	AF-02
3	12T	確認面	土師器	小型裏か	内外面：ナデ 外底面：ヘラケズリ	-	-	(1.7)	一部	AF-03
4	8T	確認面	弥生土器	不明	外面：縄文 (RL) 器厚：7.5mm	-	-	(2.8)	一部	AF-05

第 29 図 北割山遺跡出土遺物 (1)



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	8T	確認面	土製品	不明	外面：ナデ→ヘラケズリ 内面：ナデ（剥落著しい） 円形孔1か所	-	-	(11.8)	一部	AF-04

第30図 北割山遺跡出土遺物（2）

2. 愛宕山遺跡

調査要項 (第1表15)

遺跡名：愛宕山遺跡 (遺跡登録番号 05012)
 調査原因：進入路・駐車場新設工事計画
 調査箇所：蔵王町大字平沢字立目場 81
 調査期間：平成26年11月17日
 対象面積：220m²
 調査面積：177.8m²
 調査主体：蔵王町教育委員会
 調査員：鈴木雅

遺跡の概要

円田盆地と村田盆地を画する愛宕山丘陵の尾根上に立地し、弥生・古墳時代の散布地として登録されている。本遺跡中央部の標高は約169mで、平地との比高差は西側の円田盆地から約90m、東側の村田盆地から約140mを測る高所に立地している。周辺には本遺跡と連続する尾根上に古峯神社古墳、夕向原古墳群が分布する。遺跡のほぼ全域が愛宕神社境内となっており、神社の建物が立地する頂部の平坦面は高さ1m前後の切土によって造成されたことが窺える。本遺跡では平成8年に藤沢敦らによる測量調査が行なわれ、古墳の可能性が検討されたが、古墳に関わる地形は確認されていない (藤沢2000)。平成24年度には愛宕神社神楽殿再建計画に伴う発掘調査で古墳時代の袋状土坑 (貯蔵穴) 1基など (町18集)、平成25年度には愛宕神社参道改良工事計画に伴う発掘調査で古墳時代前期の竪穴住居跡1軒 (町20集) を確認している。

調査の成果

工事計画範囲にトレンチ5か所を設定して調査を



第31図 調査地点位置図

実施した。基本層序は、1層：表土 (腐植土)、2層：褐色森林土、3層：礫混じり黄褐色ローム、4層：白色シルトとなる。4トレンチ北部の周辺は西側斜面と既存道路に挟まれた幅約6m、高さ1m程度の土手状の高まりとなっている。これ以外の各トレンチでは、既存道路面とほぼ同じ高さで2層以下の各層の削平面が露出した。旧地形は神社の立地する緩斜面と斜面部の境界にあたり、既存道路の開削により切り通し状に造成された4トレンチ北部付近を除いて道路面まで一旦削平されていることが判明した。各トレンチと



写真57 遺跡遠景 (西から)

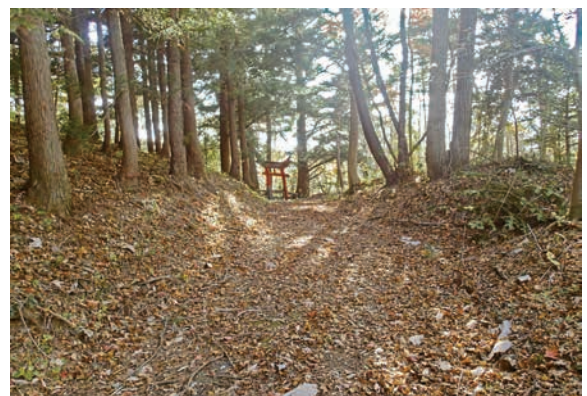


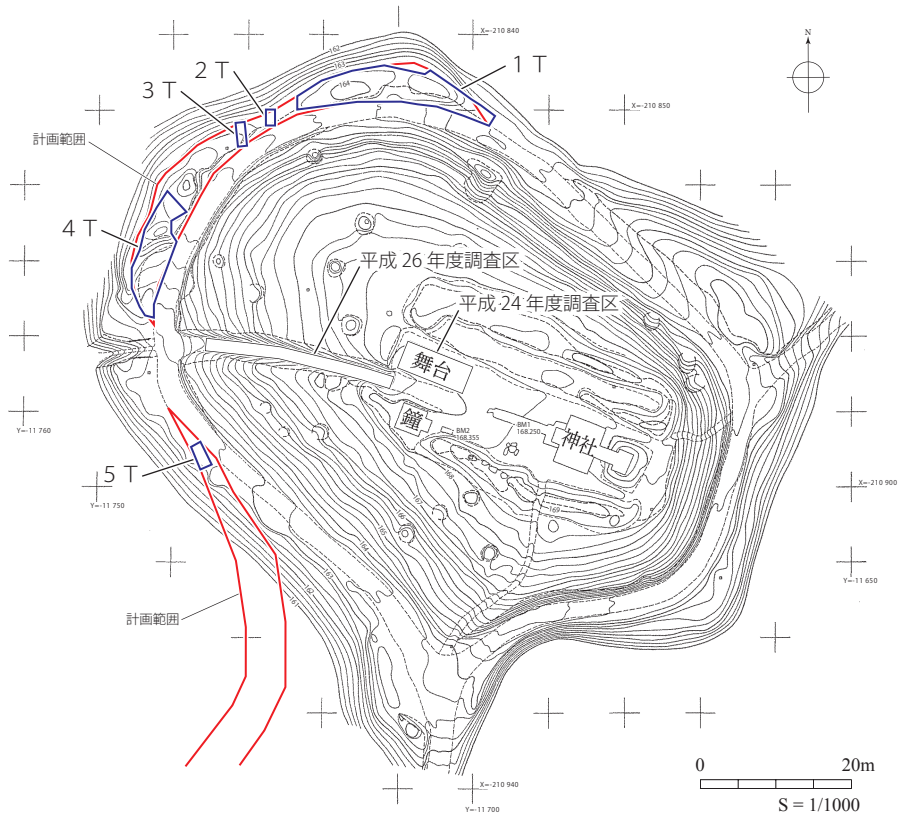
写真58 調査前現況 (北東から)



写真59 調査前現況 (南から)

も遺構は確認されず、遺物は3トレンチ攪乱層から土師器小片が出土した。小型品の体部破片で外面に細かいハケメ調整と粗いミガキ調整を施す。

以上のことから、工事計画範囲の大部分は旧地表面が後世の削平を受けており、保存の対象とすべき遺構は残存しないことが判明した。



第32図 愛宕山遺跡調査区配置図 (藤澤 2000 に加筆して作成)



写真60 1トレンチ (東から)



写真61 1トレンチ (西から)



写真62 3トレンチ (北から)



写真63 4トレンチ (南から)

第4章 総括

1. 本書では、平成26年度に実施した埋蔵文化財保存協議の概要と、これに伴って実施した発掘調査のうち、下記の調査について報告した。
 - (1) 小規模開発事業に伴う遺跡の記録保存を目的として実施した緊急発掘調査（1遺跡1件）
 - (2) 各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査（2遺跡2件）
2. 緊急発掘調査では、下記のことが明らかになった。
 - (1) 原遺跡
 - ① 町道改良工事計画地内で竪穴住居跡4軒、溝跡5条、落とし穴状土坑3基、土坑9基、柱穴7か所を確認した。
 - ② 落とし穴状土坑3基は溝状タイプのもので、縄文～弥生時代のものと見られる。
 - ③ 竪穴住居跡1軒は古墳時代前期に位置づけられ、本遺跡南部から六角遺跡北部にかけて集落が展開していることが判明した。
 - ④ 竪穴住居跡3軒は平安時代前葉に位置づけられ、小規模な集落が形成されていたことが判明した。「西」などと判読できる墨書土器が複数見られる。
 - ⑤ 溝跡、土坑の多くは近世以降のもので、溝跡は近世後期以降の区画溝や道路側溝、土坑は近代以降のものが見られる。
3. 遺構確認調査では、下記のことが明らかになった。
 - (1) 北割山遺跡
太陽光発電所建設計画地内は沢地形に面した斜面で、後世の削平の影響が大きく遺構は確認されなかった。遺構外から弥生土器、ロクロ土師器、不明土製品などが出土した。
 - (2) 愛宕山遺跡
進入路・駐車場新設計画地内は丘陵頂部から続く緩斜面がやや急な斜面に変わる傾斜変換部にあたるが、後世の削平の影響を受けており遺構は確認されなかった。

引用・参考文献

- 伊東信雄 1955「各地域の弥生式土器―東北―」『日本考古学講座4』杉原荘介編 河出書房
- 氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」歴史 14 東北大学史学会
- 風間観静 1983「仙台藩の街道」『宮城の研究5 近世編Ⅲ』渡辺信夫編 清文堂
- 鹿島茂 1993「第二節 食生活」「第二章 衣食住」「第一編 民俗」『蔵王町史 民俗生活編』蔵王町史編纂委員会
- 刈田郡教育会 1928『刈田郡誌』宮城県刈田郡教育会編
- 蔵王町史編纂委員会 1987『蔵王町史 資料編Ⅰ』
- 蔵王町史編纂委員会 1989『蔵王町史 資料編Ⅱ』
- 蔵王町史編纂委員会 1993『蔵王町史 民俗生活編』
- 蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史 通史編』
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」研究紀要 VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 鈴木雅 2006「第5章 考察」『六角遺跡』蔵王町文化財調査報告書第6集 蔵王町教育委員会
- 辻秀人 1994「東北南部における古墳出現期の土器編年その1」『東北学院大学論集歴史学・地理学』第26号
- 辻秀人 1995「東北部における古墳出現期の土器編年その2」『東北学院大学論集歴史学・地理学』第27号
- 林謙作 1962「東北地方早期縄文文化の展望」考古学研究 9-2 考古学研究会
- 藤沢敦 2000「阿武隈川下流域の前方後円墳(その1)」宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 1980a「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書2』宮城県文化財調査報告書 62
- 宮城県教育委員会 1980b「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書 71
- 宮城県教育委員会 1981「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書 81
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1993『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993
- 村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末―東北地方の場合―」『古代官衙の終末をめぐる諸問題―第1分冊 問題提起・各地方の概要―』第3回東日本埋蔵文化財研究会 東日本埋蔵文化財研究会
- 柳澤和明 1994「東北の施釉陶器―陸奥を中心に―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東3 施釉陶器―』古代の土器研究会 第3回シンポジウム 古代の土器研究会

蔵王町文化財調査報告書 (蔵王町教育委員会発行)

- (1990)『堀ノ内遺跡』
- 第1集 (1997)『堀の内遺跡』
- 第2集 (2002)『諏訪館前遺跡』
- 第3集 (2005)『都遺跡ほか(都遺跡・窪田遺跡・新城館跡)』
- 第4集 (2006)『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』
- 第5集 (2007)『中沢A遺跡』
- 第6集 (2008)『六角遺跡―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―』
- 第8集 (2009)『戸ノ内遺跡―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―』
- 第9集 (2009)『青竹遺跡』
- 第10集 (2011)『西浦B遺跡―商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査―』
- 第11集 (2011)『窪田遺跡―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―』
- 第12集 (2011)『小原遺跡―特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査―』
- 第13集 (2011)『十郎田遺跡1―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―』
- 第14集 (2011)『十郎田遺跡2―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―
SE66 井戸跡出土木製遺物編 附 十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』
- 第15集 (2012)『西屋敷遺跡―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―』
- 第16集 (2013)『前戸内遺跡―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―』
- 第17集 (2014)『磯ヶ坂遺跡―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査―』
- 第18集 (2014)『蔵王町内遺跡発掘調査報告書1(平成18～24年度)』
- 第19集 (2014)『円田盆地の遺跡群1―経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査<総括編>―』
- 第20集 (2015)『蔵王町内遺跡発掘調査報告書2(平成25年度)』

報 告 書 抄 録

ふりがな	ざおうちようないせきはつちつちようさほうこくしょ 3							
書名	蔵王町内遺跡発掘調査報告書 3							
副書名	各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査（平成 26 年度）							
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 21 集							
編著者名	鈴木 雅							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10 TEL 0224-33-2328 FAX 0224-33-3831							
発行年月日	西暦 2016 年（平成 28 年）3 月 25 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
原遺跡	蔵王町大字 小村崎字原東 ・戸ノ内地内	43010	05111	38° 07' 41"	140° 41' 36"	2014.09.03 ～ 2014.10.18	450.0㎡	町道中ノ内磯ヶ 坂線改良工事計 画（本発掘調査）
北割山遺跡	蔵王町大字 小村崎字山崎 40-3	43010	07015	38° 07' 08"	140° 42' 06"	2014.04.08 ～ 2014.04.09	259.5㎡	太陽光発電所建 設計画（遺構確 認調査）
愛宕山遺跡	蔵王町大字 平沢字立目場 地内	43010	05012	38° 06' 11"	140° 41' 46"	2014.11.17	117.8㎡	進入路・駐車場 新設工事計画 （遺構確認調査）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原遺跡	集落跡	縄文～弥生	落とし穴状土坑 3 基		なし			
		古墳前期	竪穴住居跡 1 軒		土師器			
		平安前葉	竪穴住居跡 3 軒、土坑 1 基、 柱穴 2 か所		須恵器、ロクロ土師器、墨書土 器			
		近世以降	溝跡 5 条、土坑 8 基		陶磁器、銭貨			
		不明	柱穴 5 か所		なし			
北割山遺跡	散布地	弥生	なし		弥生土器			
		平安	なし		ロクロ土師器、不明土製品			
愛宕山遺跡	集落跡	不明	なし		土器片			
要約	<p>平成 26 年度に実施した遺構確認調査・小規模緊急発掘調査について報告した。主な成果は下記のとおり。</p> <p><小規模緊急発掘調査></p> <p>原遺跡 縄文時代と見られる落とし穴状土坑 3 基、古墳時代前期の住居跡 1 軒、平安時代前葉の住居跡 3 軒などを確認した。南側に隣接する六角遺跡との一体的な集落形成が窺われる。</p> <p><遺構確認調査></p> <p>北割山遺跡 遺構は確認されなかった。少量の弥生土器、ロクロ土師器などが出土した。</p> <p>愛宕山遺跡 遺構は確認されなかった。ごく少量の土器片が出土した。</p>							

印刷製本仕様

製 本：A4 判(縦)、無線(あじろ)綴じ、並製本
ページ数：60 ページ

印 刷：表 紙 オフセット印刷、片面 4 色刷り、280 線
本文等 オフセット印刷、両面 4 色刷り、210 線

用 紙：表 紙 コート 225kg (PP 貼加工)

見返し 上質 135kg

本文等 マットコート 90kg

原稿形式：Adobe® InDesign® CS5.5 (7.5.3) PDF /X-1a:2001
(OS：Microsoft® Windows® 7 Professional)

ISSN 2188-2525

蔵王町文化財調査報告書 第 21 集

蔵王町内遺跡発掘調査報告書 3

各種開発事業に伴う遺構確認調査・
小規模開発事業に伴う緊急発掘調査 (平成 26 年度)

原遺跡・北割山遺跡・愛宕山遺跡

2016 年 (平成 28 年) 3 月 25 日 印刷・発行

編集・発行 蔵王町教育委員会

〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北 10

T E L 0224-33-2328 F A X 0224-33-3831

印刷・製本 株式会社 グラフィック

